
仮面ライダー × 仮面ライダー フォーゼ&OOO&W&DCDfeatEVA NOVEL大戦COSMO

XX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー × 仮面ライダー × 仮面ライダー × 仮面ライダー フ
オーゼ&OOO∓W∓DCDfeatEVAN
OVERL大戦COSMO

【ZPDF】

N2504Y

【作者名】

XX

【あらすじ】

三つの世界に運びいる三つの欲望

一つは破壊者の世界に運びいる世界の破壊

一つは全ての再構成の集まつた世界に運びいる世界の終末と再生

一つはライダーのいない世界に運びいる世界のやり直し

それぞれの言葉は違えどそれは全て同じ意味を持った欲望

世界の破壊者と呼ばれたティケイド

一人で一人の仮面ライダーWと欲望の王オーズ
そして新たなる仮面ライダー、フォーゼ
三つの世界を守る4人の仮面ライダー、そして三つの世界に運び居
る欲望が一つになった時、戦いは宇宙へと舞い上がる！

仮面ライダー・ティケイド（前書き）

自分の世界に辿り着いた門矢士、時折旅に出でては世界の物語を繋いでいた士達は、世界の崩壊を止める最後の旅にでる！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

仮面ライダー・ティケイド

後にANGEL ATTACKと呼ばれることになった仮面ライダー達とゼーレの戦いからはや4年の年月が流れた。

それぞれ、旅に出るもの、幸せを掴んだ物さまざまな道を選んでいるが、まさに平和そのものと言えよつ。

光写真館

「帰ってきたか」

「僕としてはお宝も手に入つたし満足だけどね」

「あのなあ…」

背景スクリールを見て咳く士、相変わらずな海東。そしてそんな海東に苦笑するユウスケ。自身の世界を手に入れたものの、気まぐれで旅を続いている光写真館一行。どうやら別の世界に旅に出て帰つてきたばかりのようだ

「でも、大樹さん。それって確か…」

祖父栄一郎の入れたコーヒーを持つて夏海が海東の持つている物を見て顔を真つ青にする

「そう！これはジユエルシードと言ひ、魔法少女には無くてはならない物だよ！まさに魂そのものだからね最高のお宝じゃないか…！」
「んな訳あるか…！」

あっけらかんと言い放つ海東に何故か片腕だけをRICKWAGAの物にして殴るのはユウスケだ。海東は撃沈。そしてその海東を無視して士達はジユエルシードを前に話し合いを始める

「で、どうする？もう一度行くとしてもまたあの世界に行けるかどうかは限らないぞ？」

「ですよね…。ああ！“めんなさい”…皆さん！」

「まあでもあれが悪い訳だし最悪土下座でもいいし首刎ねて差し出しても良いしね」

「ユウスケ、それは過激すぎます。せめて半殺しで」

「讓歩になつてないぞ？夏海」

士が中心になつて話を進めるが、コウスケの過激な案に結局まとまらなかつた

「どうしたんですか？」

「いやあな、海東の奴が魂の塊であるジユエルシードとか言つぽ口を盗んできてな」

「随分と大変な事になつていますね」

「ああ、そなんだ…つてお前は…！」

「お久しぶりですね、ディケイド」

いきなり士の後ろに現れたのは管理者である紅渡だ。いつの間にか辺りは夜の町並みに変化している。そして渡は士に向き合って口を開く「ディケイド、これからあなたには最期の旅に出でもらいます」

「最期の旅…だと？」

渡の発言に士は首を傾げた。確かにディケイドの空間移動能力は健在の筈。一体何故、最後の旅なのかという訳だ

「言葉足らずでしたね。正確には崩壊の危機にさらわれる世界への最後の旅です」

「つまりは、その世界を俺に救えという訳だな？」

「そういうことです」

微笑みながら渡は士の問いに答えた

「それでは朗報を期待していますよ。ディケイド」

そう言つてまた辺りは写真館に戻つた

「士君、どうしたんですか？」

「いや、なんでもない（最後の旅だと？まさか世界の崩壊は収まつたというのか？）」

夏海が心配そうに顔を近づけているが士は意識を思考の海に落としていた

「みんな居るかい？クッキーが焼けたよ…つてわわわ…！」

クッキーの入つた皿を放り出してこけるのはこの家の主である光栄二郎。無論クッキーの皿は復活していた海東がキャッチしていたが。

そして背景ロールに激突した栄一郎。その衝撃で背景ロールの絵柄が変わる

「ディケイドの…紋章？」

「まさか…ディケイドの世界？」

世界の破壊者「ディケイド」の世界を巡り、その瞳は何を見る
これは、かつて世界の破壊者「ディケイド」と呼ばれた青年門矢士と門河テル。そして二人の仲間達の新たなる物語である…

仮面ライダー「ディケイド」FINAL STORY「ディケイドの世界」

人は何のために生きているのだろうか？俺はこの質問こそが人類の永遠の謎だと考えている

結論を言えば人は自分の為に生きている。他人なんかどうでもいい、自分さえよければいい、それが人間の本性だ

いくらきれいごとを並べようと、いくら人のためと言おうと結局は自己満足でしかない。しかもその善意は時に悪意に変わる。誰かは忘れたがこんなことを言つた人も居る『一番たちの悪いのは善意だ』と。事実、アフリカの難民達を救うために送つた物資だつて、何かしらの災害で被害を受けた被災者に送つた物資だつて、たとえ善意だとしても当事者達が望んでいるものと違うのなら何の意味も無いだろう。役に立たないのだから

そういう押しつけの善意ならいらない。それは偽善だ、ただの自己満足だ。だからといって偽善を否定する訳でもない。だつて人は皆

偽善者なのだから。

人は与えられた情報でしか物事を見ないし、感じよつとも、考えようともしない。それは仕方ない事だ。俺だってそんな人間だ。あくまでも俺の考えだから批判は甘んじて受け入れよう。それもまた一つの意見なのだから、それによつて自分の視野が広がればなおの事いい。新しい視点から物事を見る事が出来るのだから、新しい発見があるだろう。それもまた面白い

だから俺は人間を悲観しない。まあ、他人の事なんて知つたこつちやないし、分かつてやろうとも思わないが。人間は自分の本性を隠すから、分からぬ事だらけだ。些細な事で争いと起こす。まあ、人の歴史は争いの歴史なのだから、あながち間違つていないんだがそうそう、争いで思い出した。こう考えるとイジメだつて無くなる事は無いだろう。どつかの馬鹿はいじめた方が一方的に悪いと言うがそれはおかしい。いじめられる方も悪い、だつていじめられるのはたいてい抵抗もしないし、やめての一言も言わない。言つたとしてもどうせ終わらないだろうが、だからといって暴力に頼るのもどうかと思う。結局、人は力を持てばそれを使つたがるから…だから原爆投下の悲劇が起つた。

さて、長つたらしく前置きをしたが、これは俺個人の意見として考えておいてほしい。いきなり地の文をやつてくれと言われてとつさに思ついたのだからそこは勘弁してくれ

さて自己紹介といこうか、俺の名は門河テル。仮面ライダー・ディケイドだ。これでも18歳と青春まつただ中の筈なのだが特に何も思う事は無い。逆に青春と言う言葉に嫌悪感を持つてたりする。まあ、そんな事はどうでも良い

え？授業はどうしたつて？別につまらないから抜け出したんだ。日本の中でもトップクラスの進学率を誇るつていうから一部には無理を言わせて一緒に受験して、合格して通つているが、手応えが無過ぎる。兎に角、自分の限界を知りたかつたから特進科を選んで受験したの言つのに、まったく持つて限界が見えてこない。不思議な

物だ

今思うとこの国の最高学府だつて手応えが無い。模試なんて常に合格判定うだし、後は出席日数さえ確保しておけば問題無し。毎日が退屈過ぎる。特に何も起こらないし平和そのものだ。…逆に平和ボケしないか心配だが

「おーい！ テル！！ 何辛氣くさい顔してんだよ！」

「ああ、カイオとカズヒトか」

廊下で歩いていた俺に声をかけてきたのは、小学生からの友である、福沢カイオと吉山カズヒトだ。一人は普通科なので滅多に会わないのだが、俺が普通科の校舎に来てるからあつたんだろ

「それにしても特進科のエースが普通科になんのようだよ？」

「何言つてんだ。どいつもこいつもガリ勉ばつかでつまらないんだよカズヒト。普通科の奴らの方が人間味があつていい」

「それつて俺らが馬鹿つてことか？」

「よくわかつたな、カイオ」

「お前な！！」

「冗談だ」

こいつらをからかつた方がよっぽど楽しい。特進科のガリ勉共はまつたく持つて「冗談が通用しないし、面白くない。休み時間でも教科書やら問題集やらを広げてる。あほらしい、そんなに必死になつて特進科にいるなら、普通科でトップ争いをした方がよっぽど楽しいだろ」と俺は思う。ちなみにこの意見を一回口にしたのだがその後ハル力に切り刻まれるところだつた。いやー、冷や汗物だった

「でもつてエンマとハル力は？」

とりあえず、一番親しい二人の所在を聞いてみる。先に答えたのはカズヒトだつた

「あーっと、エンマは補習中で、光さんは職員室」

「エンマもここに進学したんなら頑張らないと留年だぜ？ 今までギリギリのところで進級してたけどさ」

「まあ、エンマは俺が無理言つて此処に来させたからな」

カイオの言葉に苦笑しながら答える。あいつの幸運体質はどつでも

良い所で發揮されるのが大抵だ

「おーりお前ら！カズマサ様のお通りだ！道をあける！」

いきなり馬鹿が吠えてきた。どつも奥の方にいかにも成金の息子ですよと言つた感じの男子生徒の姿が見える。あんな豚みたいな奴が廊下を歩いたらさぞかし迷惑だろう

「聞こえてるのか！」

「聞こえない。聞こえない。馬鹿にかまうな馬鹿がうつる。これ、

俺の考え方

「貴様！」

いきなり殴り掛かつてくる馬鹿Aをとりあえず鳩尾に一撃入れて黙らせた。何でおれはこつも面倒事にことあるごとに巻き込まれるのだろう。俺の平穏な日々はいつに？

「特進科では見かけないから普通科か。一体どんだけ威張つてるんだ？」

「何でも、国会議員の息子らしいぞ？」

「つまり親の七光りか」

呆れた。4年経てば国会議員なんて職を失うとこに。俺の記憶だと、今世間では解散総選挙の噂が流れてた筈だが

「来たぜ」

「あんなの廊下を歩いてたら迷惑この上ないな」

近くで見ると出来る事なら一生かかわり合いを持ちたくないような奴だ。顔みてるだけで苛ついてきた

「おい、道をあけろ！」

「断る。お前に指図される筋合いは無い」

どつやら取り巻きであらう馬鹿Bが言つてくるが適当にあしらつておくか。この手の馬鹿は関わりを持たない方が良い

「お前見かけないな？特進科の奴だな？」

「お前に答えて何になる。自分が損するような情報は流すつもりは

無い」

無表情で会話をするのは得意中の得意だ。動搖なんて見せた瞬間に終わりだしな。にしてもテンプレート通りだな。ホント、不良とかには絡み方の教科書でもあるのか？

「どうなつても知らないからな？カズマサさまに歯向かつた事を後悔すると良い」

「ならその逆も然り。俺を起こらせない方が得策だぜ？お前らも俺に関わって後悔するなよ？」

覚えてろ！と言いながら馬鹿Bはカズマサとか言う男子生徒の元に行く。どんだけテンプレート通りなんだよ。あほらしい

「おい、テル？」

「大丈夫だ。国會議員だかなんだか知らんが、俺の人脈を甘く見てもらつては困る」

実際個人的なつながりでなら天皇陛下だらうと、アメリカの大統領だらうと、国連事務総長だらうと、世界の要人達に繋がる人脈は持つていい。どこまで使えるかどうかは試した事が無いので分からんが、情報は結構入つてくるので便利この上ない

ん？何か取り巻き共が何か取り出した？あれは…ガイアメモリだと？

「どうする？テル」

既にカイオはカイザギアを腰に巻いている。別に変身しなくてこんな奴ら…

「いい。マスカレイドメモリ程度なら変身しなくても……」

既に馬鹿共はマスカレイドーパントになつてている。…後でユキタ力に連絡しておいて実験台にしてもらつか…。こんな奴らは…

「生身でも勝てる！」

多分この時他人から見れば俺の瞳は紅と翠に輝いていだらう。俺が人について疑問に思い、そして軽蔑する理由の一つ

「お前！ば…化け物か！？」

この瞳を見た奴らはたいていそう言つてくる。だけどな…

「傍目から見ればお前らの方がよっぽど、化けもんだよ！…」

俺の右手に力が集まつていく、そして巨大な弾丸となり、あいつら

に照準を合わせる。俺が持つ、人の域を超えた力。その代償は自身の命

「天空の雄叫び、ルッジート・ディ・チエーリ！」

周りに被害が出ないように、自分に負担がかからないように威力を最小限に押さえた一撃で、メモリブレイクを完了させる

「つつ…。やっぱり少し無茶したな…」

右手に激痛が奔った。よく見ると筋が切れてるし腕は変な方向に曲がっている、どうもあの戦いが終わってからから調子が悪い。さすがにレジエンドコンプリートを使ったのは拙かつたかな？

「大丈夫かよ？」

「なんとかな。でも…大丈夫だ」

俺の力は二つ。時空制御と天候操作だ。何故そんな力があるのかは教えるつもりは無いが…。とりあえず、時空制御の力を腕にかけて傷を治す。ついでだからさつきの攻撃で壊れた箇所にも力を使って元通りに復元する、証拠隠滅完了！

「さてと、さつき気づいたんだが、別世界から来訪者が来てるようだな…。カイオ、ちょっと学校抜け出すから後よろ…」「いや、お前特進科だろ！？俺は普通科だ！」…わかつたよ

最後まで言う事が出来なかつたので、とりあえず昼休みまでは授業に参加しよう。にしても、誰だろうな…妥当な線としては渡か剣崎か…大穴で土も考えられるな…

（）

という訳で昼休みになつた事だし、先生はうまく騙してから校門を出る。まあ、早退に関しては問題ないだろ。別に内申無くても試験で100点すれば問題ない。とりあえず、時間を潰すために行きつけの喫茶店に来たんだが…

「光写真館…ということは」

兎に角、入るかと思った矢先にドアが開き、中から見覚えのある男

女が出てくる

「お前は、門河！？」

門矢士。原点の仮面ライダーデイケイドある意味再開を楽しみにしていた男だ

それにしても、あいつらも気配を消すのが下手だな

「よつ、久しぶりだな士。だが、再開を喜んでいる暇はなさそうだ」

「のようだな」

俺達を囮むようにして現れたのはショックカー戦闘員だ。そういうえば、何キャラシヨックカーとか言う組織があるってコキタカが言つてたな。とりあえずそんなことはどうでも良いので、デルタドライバーを腰に巻く。士や夏みかん、雄介のリイマジも既に経にsん準備OKか

「変身！」

「スタンニングバイ コンプリート」

デルタに変身する。デイケイドは基本的に使わない。カードを使うのが面倒だからだ。本気で戦うときはデイケイドを使うけどな

「コウスケ！ 夏海！ 行くぞ！」

「「「変身！」「」」

「カメンライド デイケイド！」

「かあ～ふ」

デイケイド、キバーラ、クウガ。世界の旅人達がその姿を見せた

「行くぜ！」

俺は士達に、なによりも自分にそつ言つた

（）

さて、なんとかあれを撃退した後、士達から事情を聞いてから学校に向かつた。どうもこの世界での士の役割は俺達の通つている高校の教師らしい。さらに俺が所属している部活の顧問というおまけ付きで

「なあ門河、この万部って何なんだ？」

「万屋つてあるだろ？」

「ああ、何でも屋つて奴だよな」

「万部はまさにそれだ。部活の助つ人や地域の人達からの依頼の解決…あげくの果てには臨時教員と多種多様だ」

「最後のにはツツ「ミを入れた方が良いのか?」

「臨時教員は極端な例だ。普通ならそんな依頼は来ない。でもってここが万部の部室だ」

普通科の校舎の一角にある今は使われていない古びた応接室。ここが万部の活動拠点だ

「ユキタカー、いるかー？」

とりあえず、殆ど此処に入り浸つてゐる生徒：俺の友達の一人である山谷ユキタカがいるかどうか見てみる。パソコンがあるつてことは此処に居たな？

「あー、カイザギアの保守点検か。そういえば、ザビーゼクターとかどうした…成る程な」

忘れてた。ユキタカの奴、大の虫嫌いだった、虫見た瞬間にクロツクアツプレベルのスピードで逃げ出すから、カブト系のライダーシステムの点検は俺の役目なんだよ…

「というか、ここつて本当に高校か？」

「一応な。というか万部が異常なだけだ。設計図さえ見てしまえばその機械を作り上げ管理することが出来るメカニック山谷ユキタカ、ダメダメのくせして幸運体質の門矢エンマ、異常な強さを持つ女剣士光ハルカ。後の二人は基調な普通福沢カイオと吉山カズヒトだ」「確かに部活の公認される条件は…部員が5名以上、顧問が居る事。だつたな」

「あと部長が決定されている事。部活が出来てから一ヶ月以内、世代交代した場合は半月以内に決定する事だ」

とりあえず備品の「一ヒーメーカーで「一ヒーを煎れながら話を続ける

「さてと、お前が来たつて事はこの世界が崩壊に向かつてゐて

「ことだよな？しかも管理者であつた俺が対応出来ない程の

「ああ、多分な」

「とこりことは心当たりはある。多分あいつの……」

「俺が最後まで言い切る事は出来なかつた。何故なら……」

「テル君！あいつが！！」

エンマの乱入と、外からの爆発音。そして……

「出てここ、もう一人の俺……次はこの世界を破壊する……！」

黒き破壊者、仮面ライダー・ダークティケイドの襲来のせいだ

「ゼロ……あいつ……士！エンマ！行くぞ！！」

俺はエンマと士にさつ言つて後部室を飛び出した。すぐにエンマと

士は追いかけてくる

「カイオ君とカズヒト君は？」

「あいつらは自力で行くだろー。」

とにかく一般生徒に被害が行かないように食い止めないとな

FINAL STORY～ディケイドの世界～

「なんでここにあいつが！」

「しらん！」

カイオとカズヒトはダークディケイドの姿を窓から確認するとすぐ
に外にでていた

「9…1…3…スタンニンバイ」

カイオはカイザフォンにコードを入力してエンターキーを押し、カ
イザフォンを閉じて右肩まで持つて行く

「来い！ザビーゼクター！」

カズヒトはザビーゼクターを呼び出す

「「変身！…」」

「「コンプリート」」

「「ウンシン チェンジワップス」」

黄色いフォトンブラッドに包まれてカイオは仮面ライダーカイザに、
カズヒトは仮面ライダーザビーに変身する

「ほう、カイザとザビーか」

「やつぱりあいつと同じ声で言わるとムカついてくる」

「カイオ落ち着け」

テルに似た相手を小馬鹿にした口調で話すダークディケイドに対し
て不快感をあらわにするカイザ。何やつてんだか

「行くぜ…」

「レディ」

カイザはカイザブレイガンにミッションメモリーをセットして、ダ
ークディケイドに切り掛かって行く

「ほつ、つと」

ダークディケイドはそれを軽く受け流しながら後ろに下がる

「カズヒト！」

「分かつていいー！」

ダークディケイドの背後にはクロックアップを使って移動したザビーの姿が、このまま挟み撃ちにしてしまおうという作戦だったようだが…

「アタッククライド セイリングジャンプ！」

「よつと！」

スカイライダーの能力ではるセイリングジャンプでダークディケイドは空を飛ぶ

「なつ…！」

カイザはカイザブレイガンを後少しという所でザビーに振り下ろしそうになるが、そこはつまづいて構え直す

「ブラスターモード」

「このやろー！」

「我武者らに撃つてきた所で何もない」

カイザブレイガンをブラスターモードにしてダークディケイドを攻撃するが、攻撃されている筈のダークディケイドはそれを避けて行く

「カイオ！落ち着け！！校舎に被害が行く！！」

と言いつつもザビーは校舎に向かって行く流れ弾をクロックアップを使って落として行く

「これでおしまいか？」

ダークディケイドはカイザに向かつてそう問いかける

「アタッククライド ブラスト！」

「なら今度はこちらの番だ」

ダークディケイドブラストがライドブッカーガンモードから放たれる

「つ…！？」

成す術も無く攻撃を受けるカイザ。これで終わりか…と思つた時

「カイオ君！大地の重力、グラヴィダ・デッラ・テラ…！」

いきなり聞こえてきた声と共に、いくつもの星が現れてその重力で弾が全て引き寄せられた

「エンマ…？」

「無茶するからだよ？」

「煩い……」

「エクシードチャージ」

エンマはカイザに駆け寄るがカイザはそれを顧みずにカイザフォンのエンターを押す

「はつ……」

「ぐつ」

カイザブレイガンから放たれた黄色の弾丸がダークディケイドを拘束する

「はああああああ……！」

そして×の字をした黄色いポインターと共にダークディケイドを切り裂く。カイザの必殺技の一つ、カイザスラッシュなのだが……

「アタックライド インビジブル」

ダークディケイドはインビジブルでその姿を消してしまつ

「なに！？」

「ファイナルアタックライド カ・カ・カ・カ・カイザ！」

「しまつ！？」

そして背後から放たれたのはダークディケイドの「ルドスマッシュ」。いつの間にかカイザポインターを召還していたのだ

「アタックライド コンファインメント！」

だが、その一撃は消されてしまう

「大丈夫かー？」

上空から現れたのはジェットスラッガーで飛行するデルタとフォームライド・ブレイドでカメンライドしたディケイドブレイドジャックフォームだ

「来たか、テル。それと原点の破壊者」

「へえ、まだ俺も現役のようだな」

ダークディケイドの言葉に皮肉たつぱりに言つロブレイド。デルタは黙つたままだ

「今までつかずじまいだった決着を付けようぜ？そしてどっちが本物なのかをな……」

「アタッククライド ブラスト！」

ダークディケイドはブッカーガンモードでテルタを撃つ

「黙つてろ」

だがその弾丸をテルタはテルタムーバーの弾丸で全て相殺した

「今だ、ライダースティング！！」

「ライダースティング」

「ぐおつ！？」

今まで蚊帳の外だったザビーがダークディケイドが油断している所に必殺技のライダースティングを炸裂させる

「お前には用はない！消えろ！…」

「がはつ！」

だが目立つた一撃を「えられなかつたよう」でザビーはダークディケイドに殴り飛ばされる。そのまま壁にぶつかつて変身解除された

「相変わらず…か」

テルタはそう呟いた後、変身を解除した

「ゼロ、お前は何故そこまで本物偽物にこだわる。お前は俺の破壊本能の具現化した存在。それなら俺と同じだらうが」

「だからこそだ。俺の破壊本能は俺を生み出した存在すらも破壊したいと言つ訳だ」

「そつかよ…なら」

テルはディケイドライバーを腰に装着する

「此処で…倒すのみ！変身！！」

「カメンライド ディケイド！」

テルはディケイドに変身する

「土。お前は手を出すな」

「おじおじ、客に向かつてそれは無いだらうが。手伝わせてもらひつ

「…好きにしろ」

3人のディケイドはライドブッカーをソードモードにして構える
「うおおおおお…！」

先に動いたのはロブレイド。空中からの一撃にダークティケイドは翻弄される

「やりよー」

そこにティケイドの一撃が入る。だがそこは流石と言つべきか瞬時に反応してガードする

「後ろががら空きだーーー」

「ヒクシードチャージ」

だがそこにカイザがカイザボインターを足に取り付けダークティケイドにゴルダスマッシュを叩き込む

「ぐつ……」

「ファイナルアタックライド ブ・ブ・ブ・ブレイドー」

「はあああああああーーー」

そこにロブレイドのライトニングスラッシュが決まる

「馬鹿……」

だがティケイドは有利な状況にも関わらず一回ダークティケイドと距離を置く

「おー、テル！何やつてんだーーわざとダメを…」

カイザは最後まで言つ事が出来ずに地面に吊り付けられた、と思つたら直ぐに宙を舞い、そして落とされる

「カイザ！？ どわーー？」

すぐにカイザに駆け寄らうとしたティケイド（土）だったがいつの間にか宙を舞い、地面上に落とされる

「弱い」

そしてティケイド（土）を踏みつけるよつとして現れたのはダークティケイド。いつの間にかアタックライド・クロックアップを使つたのだろうか

「世界の破壊者と聞いていたからな。どんな物かと楽しみにしていたがこのままか」

「が……ーーー」

「死ね」

「君がね」

「ファイナルアタックライド テイ・ティ・ティ・ティエンド！」
エンマの変身したティエンドのティメンションショートが放たれ、
辺りは煙で覆い尽くされる

「くつ！？」

ダークティケイドが煙を払つたときにはそこにはテルの変身したティケイドしかいない

「お前は残つたのか？」

「最後までやつとかないと気が済まないからな」「確かに」

「「ファイナルアタックライド」「
行なわれるのは必殺技のぶつかり合い
「ディ・ディ・ディ・ティケイド！」「ダ・ダ・ダ・ダークティ
ケイド！」

「「はああああああああああ！」」

最近は顔を合わせればこれで終わらせる一人だ。そして結果は…

「つと」

「つ…」

引き分け。ダークティケイドはすぐにオーロララを使って姿を消す
「ちつ、やっぱりガタきてるか？」「

ティケイドは膝をついて荒い呼吸をしている

「とりあえず、行くか」

ティケイドは変身を解除してすぐに立ち上ると大騒ぎする生徒と
教職員達を尻目に学校を後にした

（）

テルの自宅

「…で、此処に来たつてこと？」

「そう言う事…」

「…」

玄関には「王立ちしている少女とそれに弱気な笑みで会話をするエンマ」という不思議な構図が出来上がっていた

「まったく。何でこう、兄さんは巻き込まれ体質なんだろう…良いわ。エンマさん、怪我人はお兄ちゃんの部屋に放り込んだって」「じめんね。ありがと、サヨちゃん」

サヨ、それが少女の名のようだ。若干テルの弟であるコウガに顔立ちが似ているが、そこは気にしないことに…することも出来ないようだ

「ただいま」

「あ、兄さんお帰り」

テルが帰つて来たからだ。カイオ、カズヒト、エンマの荷物を持って「ごめん、テル君」「別に」

エンマは自分のバックを受け取つた後、一階に上がつた
「悪いな、サヨ。あ、救急箱出しといてくれ」

「わかったわ」

テルは一回洗面所に言つて律儀に手を洗つてうがいをした後、サヨから救急箱を受け取つて自分の部屋のある二階に上がつた
「さてと、大丈夫か？お前ら」

「背中打つた」

「体の節々が痛い…」

「俺は大丈夫だ」

とりあえず、ボロボロになつているカズヒトとカイオに手当をした後、土が話しかけてきた

「なあ門河」

「ん？」

「お前さつき俺の破壊本能から生まれたつて言つてたよな

「まあ、それに近い事は言つたな」

「それってなんなんだ？」

「話しておくか…」

テルは一息置いた後口を開いた

「門河家は代々、常人ではあり得ない運動神経、もしくは頭脳を持つている。そしてそれは生まれつき決まっていて、大抵は隔世遺伝」という形で受け継がれる」

「つまり、じいさんが運動神経抜群だったら自分も運動神経が良いってこと。という事は親父さんは頭がいいってことだな?」

「そういうことだ。俺のじいさんは運動神経が高かつたから本来なら親父は頭脳明晰の筈だった…が」

「が?」

カイオがテルの言葉の切り方に違和感を感じて会話に入ってきた。ちなみにテルの境遇について知っているのはテルの親族とハルカ、エンマだけである。そのためカイオとカズヒトは聞き耳を立てていた「親父にはそう言う能力が無かつた。それは何を意味するか、答えはこれだ」

テルは自身の瞳を紅と翠のオッドアイに変えた

「隔世遺伝がさらに隔世遺伝を起こして、周りに回って俺に影響したんだ。だから俺には頭脳も運動神経もあるんだ」

「だから成績は常時オール5、運動神経もプロ並みなのか」

カズヒトは合点がいったらしく手を叩いた

「まあ、デメリットもあるがな」

「超巻き込まれ体質と不幸体質だよね」

「その通りだ、エンマ。ついでに言うが、この状況下だと俺の不幸体質はエンマの幸運体質で相殺されている」

「でもって、コウガが運動神経を、サヨちゃんが頭脳を持つてるのはよね」

「ハルカか」

話の途中で入ってきたのは漆黒の長い髪に日本刀を腰に下げた少女、光ハルカ。テルの幼馴染みであり、何かと関係を噂されるが真相は不明。ちなみにテルに言わせると異常な強さを誇る女剣士らしいが

「そういえばサヨって、俺にも小夜っていう妹がいるんだが…」

「へー。サヨは俺の妹だ。ちなみに今は此処にいないがコウガっていう弟もいる。ちなみに「コウガとサヨは双子だ」

士の問いかけに意外だなといった表情でテルは話だ。つまり双子の兄妹はコウガが運動神経を、サヨが頭脳をそれぞれ持つて行つたらしい

「それにしても、ユキタカの奴はどこ行つたのかしら？」

「そういえば見かけないね」

ハルカとエンマはまつたく姿を見せない万部の部員の所在について話し合つてたが…

「そういうえば、アストロスイッチの調整が終わつたから実験していくとか言って、コウガのここにいつたんだつけな」

テルが所在を思い出したらしい

「ということは戻つてこないね」

エンマが分かり切つていることを言つた後、士を除いた一同はため息。そして此処にはいないテルの弟、コウガに同情していたのだった「で、話を戻すけど、俺の特殊能力もそんなイレギュラーな事例によつて世界と反発して生まれたんだ。士達はアスラクラインの世界にいたか？」

「ああ。一応な」

そう言つて士が懐から取り出したのは黒の拳撃とかかれたアタックライドのカードだった

「OK、それがあるなら話は早い。そこでの悪魔の魔力の源はなんだ？」

「世界との摩擦…そつか！」

「ああ。俺の力は世界との摩擦によつて自身の命と引き換えに放たれてるんだ。俺の目算だと、俺の寿命は持つてあと60年かな？」

「充分だと思うけど…」

「実際はガンダムの世界でいろいろあつたからまだ大丈夫なんだがな」

とりあえず、ここで話は一段落したのかハルカがサヨから受け取つ

たらしい「一ヒーをするする

「ん、うまいな」

士はその味に目を丸くした

「さてと、それでもつてこの後なんだが、ゼロの奴がどう動くかで変わつて行くんだけど…」「兄さん！」…どうした？サヨ」

「それが、いきなり玄関におつかない人達が…！」

「ん？」

サヨが言う通りに外の除いてみると、妙におつかない風貌の男達がいた。しかもそれを仕切つてているのは…

「げ、あの糞デブかよ」

テルが啖呵を切つた相手である国會議員の息子カズマサだった

「クッダラねえ。…あいつらオルフェノクとワームか」

呆れた口調で悪態をつきつつ外を見ているのと男達がオルフェノクとワームになつたのだ

「テル、俺達にやらせてくれ」

カイオは既に変身準備万端になつていて、カズヒトもザビーブレスレットの調子を確かめていた

「…此処は頼んだ。あいつが来た。士、行くぞ」

「ああ」

テルは目を紅と翠のオッドアイに変えると空間の断層を作り、士と共に消えて行つた

「いくぜ、カズヒト」

「オーライ」

「9…3…1…スタン二ンバイ」

「変身…！」

「コンプリート」

「ヘンシン チェンジワッブス」

窓を開けて屋根の上に飛び出すと、二人はそれぞれの変身ツールを使ってカイザとザビーに変身する

「使って見るか」

そしてカイザの左腕にはリストウォッチ型のツール、カイザアクセルがあつた。ちなみにファイズアクセルの色違いである

「先に行つてる」

「クロックアップ」

ザビーはクロックアップで高速移動空間に入るとワーム達に攻撃を仕掛け行つた

「俺もいくか」

カイザアクセルに取り付けられたアクセルメモリーをカイザフォンにセットする

「コンブリート」

胸部アーマーが四方向に展開する。フォトンストリームが銀色になり、複眼は黄色になる。これこそカイザの超高速形態、カイザアクセルフォームだ

「レディ」

ミッションメモリーをカイザブレイガンにセットして、カイザアクセルのスタートースイッチを押す。さらにカイザフォンのエンターを押した

「スタートアップ」 「エクシードチャージ」

「お前らなんかに…」

カイザブレイガンから放たれた光弾が次々とオルフェノク、ワーム関係無しに拘束して行く

「負ける訳ねえんだよ！」

「同感。ライダースティング！」

「ライダースティング」

ザビーはライダースティングを発動させ、カイザが取りこぼしたワームを次々と倒して行く

「はああああああ！」

カイザAFは次々とオルフェノクとワームを切り裂いて行く

「3…2…1…タイムアウト リフォームーション」

「クロックオーバー」

カイザAFは通常フォームに戻り、ザビーはクロックアップが終了する

カイザアクセルフォームのアクセルカイザスラッシュとザビーのライダースティング、二つの必殺技によりあつという間にオルフェノクとワームは殲滅完了。後は首謀者のカズマサだけになる

「くそ…お前らなんかに…！」

「コックローチ」

カズマサは苦し紛れにコックローチドーパントに変身して逃げようとするが…

「エクシードチャージ」

「はっ！」

カイザポインターから放たれたポインターがコックローチドーパントを拘束する

「はあああああ…！」

そして、ゴルドスマッシュが炸裂。だが、耐久性能をあげているのか、メモリブレイクはされない

「ライダースティング！」

「ライダースティング」

「そなああああああああ…！」

そこにザビーのライダースティングが炸裂し、コックローチドーパントはメモリブレイクされた

「さてと、警察呼ぶか」

「だな」

メモリブレイクされて意識を失っているカズマサをサヨから借りたビニールロープで縛り上げた後、サヨが警察に連絡し、カズマサは警察に御用になつた

「テル達の所に行くか？」

「だよなあ…」

カイオはサイドバッシャー、カズヒトはマシンゼクトロンを呼び出すと、それに乗り当ても無く走り出した

}{}

町外れのとある廃工場

100

「よつ、テル。それに原点の破壊者」
オリジナル

テルと同じようで少し違う笑いを浮かべるゼロ。テルと士は空間の断層を通ってここに来た

「成る程…」ここなら周りに被害ができる」ともない…か」「ええ。今までは皆、この様子を見たことがない」と…

「金額終了/09年版」で

士、ゼロ、テルの三人は自分の変身ツール…ディケイドライバーもしくはダークディケイドライバーを腰に巻く

「カスミ」

גָּמְנִי

「元ケイエー！」「タケテイケ！」

の変身するトイケイドはさらにケータッチを取り出した

「クウガ アギト リュウキ ファイズ ブレイド ヒビキ カブ

シライド デイケイドー!

ヒストリー・オーナメントにフォーゼのカードが足された、ディケイ

エントラーアクセスになる

108 始め方セミナー

ディケイドCFもライドブツカーをソードモードにして構えた

全てを破壊し、全てを繋げ！

「つまおおおおおおおお…！」

「ふん！」

ディケイドCFがダークディケイドに突っ込むが、ダークディケイドはそれを難なく避ける。そしてディケイドCFに攻撃を仕掛けようとした…が

「カメンライド オーズ！」

「させるかよ…！」

「くつ！？」

オーズに変身したディケイドがバッタレッグで跳躍し、トランクロード切りつけた

「数の上では不利…ということか…ならば！」

「アタックライド イリュージョン」

ダークディケイドはイリュージョンのカードを使い2人の分身を作り出す

「はつ！」

「やつ！…」

「とお！…」

「つてどわ！？」

3人のダークディケイドの連続攻撃をくらい、ディケイドCFは後ろに後退していく

「フォームライド オーズ！ガタキリバ！」

「分身出来るコンボがあるってことを忘れんなよ！…」

50体に分身したDオーズGKBが数の暴力で一気に3人のダークディケイドを蹴散らしてディケイドCFを助け出す

「悪い、門河」

「別に」

素っ気なくディケイドCFの謝罪に返すとDオーズGKBは新たな

カードをセットする

「フォームライド オーズ！タジャドル！」

Dオーズはタジャドルコンボになり、クジャクウイングで飛翔する

「くつ！」

「アタックライド セイリングジャンプ！」

ダークディケイドはアタックライドの力で空を飛び始める

「はつ！…」

「この！…」

「アタックライド ブラスト！」

DオーズTJDはタジャスピナーの光弾で、ダークディケイドはブラストの弾丸で銃撃戦を繰り広げて行く

「こんにゃう！…」

「ふん！」

「はつ！…」

「ぐわつ！？」

ディケイドCFは地上に残っているダークディケイド2人を相手に接近戦を行なっていく。だが、数の上ではダークディケイドの方が有利。一方を相手にしているともう一方が背後から斬りつけてくる

「このままじゃ…ラチ開かねえな…」

「リュウキ！カメンライド サバイブ」

ディケイドCFはケータッチの龍騎の紋章をタッチし、龍騎SVを召還する

「ファイナルアタックライド リュ・リュ・リュ・リュウキ！」

「はつはあつ！…」

「アタックライド スラッシュ！」

ディケイドCFと龍騎SVのバーニングセイバーとダークディケイドのスラッシュが激突。そのまま相殺される

「なつ…！？」

「アタックライド ブラスト！」

驚きで動けない所にダークディケイドの追撃が決まった

「ちつ…新しい力…使ってみるか！」

「アタッククライド クロノケンゲキ！」

ディケイドCFがディケイドライバーに装填したのは、アスラクラインの世界で手に入れたカード。音声と共にディケイドCFの銀色の部分が全て漆黒に変わる

「はあああ…」

そして右手に魔法陣が展開され、右手に力が溜まって行く

「はああああああああああああああ…！」

放たれるのは機巧魔神黒鐵アスラーマキーナくろがねの能力である重力球。そしてその一撃は…

「ぐわああああああああ…！」

一体だけではあるものの命中し、当たったダークディケイドは消滅する

「これで2対2だぜ？」

ディケイドCFはライドブッカー・ソードモードを再び構えると、残つたもう一人のダークディケイドに言い放つた

「くそつ…！」

「よそ見してる暇無いぜ、ゼロ…！」

一方、DオーブTNDとダークディケイドの本体は空中戦及び銃撃戦を続行中だつた。が、ダークディケイドの一瞬の隙をついてクジヤク光弾がダークディケイドに襲いかかる

「くつ…！」

ダークディケイドはライドブッカーの弾丸で迎撃するが数が多く、さらに追加されたタジャスピナーの攻撃を喰らつてしまつ

「流石は俺の本人格。強さは格別か…」

「何言つてやがる…お前だつて俺だらうが

「それもそうだつたな。…いいだろう、俺の本気を見せてやる」

そういうつてダークディケイドが取り出したのは黒色のケータッチ

「それか…お前の…」

「その通りだ」

「ミラージュアギト リュウガ オーガ カリス カブキ コーカ
サス ネガデンオウ ダークキバ エターナル ポセイドン コア
・ファインアルカメンライド ダークディケイド！」

ダークディケイドの姿が変わる。基本カラーはそのままだが、ヒストリー・オーナメントが装備され、そこにはダークライダー達のライダー・カードが配されている。頭部のディケイドクラウンには現在のダークディケイドの状態のライダー・カードが出現、その後ダークディケイドライバーのバックル部を外してケータッチをセットしバックル部を右腰に装着した

仮面ライダー・ダークディケイドコンプリートフォーム。全ての世界のダークライダーの力を手に入れた、ダークディケイドの最強形態だ

「いくぞ……！」

「つ……！」

ほんの一瞬で距離を詰めたダークディケイドCFはDオーブツードライドブッカーで一閃する。一気に地面にたたき落とされたDオーブツードはそのままディケイドに戻る

「門河……！」

「つ……士か」

そこにダークディケイドの分身が消えたためにフリーとなつたディケイドCFが走つてくる

「あれは……」

「見れば分かるだろ……？」

「今度は負けんぞ。本調子でないお前等、雑作も無い」

「だろうな……」

「どういうとこだ? 本調子じゃ ないつて……」

「士、聞け。あいつは普通のコンプリートフォームじや倒せない」

ダークディケイドCFの言葉にディケイドCFは疑問を感じてディケイドに話しかけたが、ディケイドはそれを遮つて話を始めた

「あれは……ダークディケイドの最強フォームだ。通常状態でも高いスペックを持つていてるダークライダーがさらにパワーアップしたん

だ…言いたい事は分かつたな？」

「ああ、大体分かつた」

ディケイドCFはケータッチを取り外すと、ケータッチに装填して
いたカードを取り替える

「アメイジングアルティメット ゴットトリーティ フォースサバ
イブ ブースター ブラスター ロイヤルキング ショウグン マス
ター スーパークライマックス ラストエンペラー ディザイアエ
クストリーム タトバリング ファイナルフォーム カメンアタック
ライド ディ・ディ・ディ・ディ・ディケイド！」

金色のボディにマゼンタ色のマント。真・最強フォームのライダー
カードが配されたヒストリー オーナメント。仮面ライダー ディケイ
ドの真・最強フォーム、パーフェクトコンプリートフォーム、ここ
に降臨

「ハア…ハア…ハア…。悪い、ここで限界みたいだ…」

ディケイドPFCが強化したのと同時にディケイドは倒れ変身解除
された

「ああ、ここからは俺に任せろ」

「ふん。お前には別に何にも用はないが、邪魔をするなら消えても
らおうか」

どちらも相変わらずライドブッカーソードモードを構えると…

「「うおおおおおおおお…！」」

ぶつかり合つた

（）（）

力の使い過ぎか…？こんな所で倒れるとはな…まだまだ鍛え方が甘
かつたか…。ん？起き上がれない…だと？

ちつ、まさかここまでガタが来てたとは自分でもびっくりだ。こん
な状態で戦つてたんだから今更ながら自分の異常性に感服する
自分の事だろう？と思うだろう。だが、自分のことは自分が一番分

からないからな…人が独りでは行きて行けないのはそう言う事だ。
そしてこんな状況で何故人について語っているのかも分からん
とりあえず、うつ伏せの間までもあれなので仰向けにならうとした
が、体中に痛みが走ってきたので止めておこう。お、首くらいいなら
上がるか

「「うお おおおおおおおお…！」」

…頭をあげてみたら、ゼロと士が対峙していた。ダークディケイド
CFとディケイドPCF。スペック上はパークターの方が上だけ
ど…ゼロは俺の同位体だからな…どこまで食い下がって行くのやら…
「はつ…！」

「つ…？」

「おりやあ…！」

お、士もだいぶ強くなつてんな。だけど、ゼロも流石と言えば流石
だ、士の斬撃を紙一重で避けてやがる

俺個人としては士がゼロの奴を倒してくれれば何とかなると踏んで
いる。実際、ここまで俺が疲労しているのも奴と分離してから（・・
・・・・）…だからな

（）

「この程度か！真・最強フォームとやらも…！」

「なわけねえだろ…！」

ダークディケイドCFとディケイドPCFの刃が何度も混じり合つ。
その度にキンといつ硬質かつ鋭い音と火花が散る

「「アタックライド スラッシュ…！」」

「おりやあ…！」

「ふん…！」

強化された刃同士がぶつかり合つ。しばらく鎧迫り合いで移行した
後、すぐに間合いをとり構え直す

「次は銃撃戦と洒落込むか？」

「望む所だ！」

「「アタックライド ブラスト！」」

次はライドブッカーガンモードから放たれる弾丸での銃撃戦。どちらも的確に相手を狙い、そして弾丸同士がぶつかり合い相殺される。時折相殺されなかつた弾が両者共に襲いかかってくるが、うまく転がつて回避した後またも弾を放つ

力量は互角、力も互角。こうなると勝敗を決めるのは変身者の潜在能力と戦闘経験で養われた実力のみ

「ふん！？」

「なつ…？」

いきなりダークティケイドCFがライドブッカーをソードモードにしたかと思うとそれを何も無い空間に一閃。すると空間に裂け目が現れ一気に間合いが詰められる

「しまつ…！」

「遅い！？」

至近距離からの斬撃。今までの抵抗した戦いが嘘のようティケイドPCFはされるがままにされ吹っ飛ばされる

「くつ…そ…」

すぐに起き上がって体制を立て直そうとするが…

「ふつ！」

またも空間の断層で瞬間に移動したダークティケイドCFによって斬りつけられる

「がつ…！」

「弱いな」

「が…あ…」

そのままダークティケイドCFはティケイドPCFを踏みつける

「これが、真・最強フォームの力…か？弱過ぎるな」

そしてダークティケイドCFはライドブッカーサムを振り上げると…

「さらばだ」

振り下ろそうとした。だがその行動はどこからとも無く飛んできた

シアン色の光弾によつて阻まれる

「そりゃあ、お前やテル君からみたら弱いだろ？」「僕たちの攻撃も蚊が刺す程度かもしれないね」

「だからといつてそれで諦める訳には行かないけどね」

「お前ら…」

立つていたのはエンマと海東。ある意味、ディケイド一人の相棒的な存在だった

「ディエンドか…何故ここが分かつたのかは追求しない事にしよう。だが！お前らを生きて返す訳には行かない！」

「なら、それを覆してあげようか」

エンマはカメンライド・ディエンドのカードを、海東はエンマから渡されたファイナルカメンライド・ディエンドのカードを自分のディエンドライバーに装填する

「カメンライド」「ファイナルカメンライド」

「変身！！」

「〔ディエンド…〕」

仮面ライダー・ディエンドとディエンドコンプリートフォーム。世界をまたぐ大怪盗ここに降臨

「つ…、まだ…無理か…」

テルはまだ起き上がりよううつめき声を漏らしながらダークティケイドCFを睨みつけた

「アタックライド ブラスト！」

「アタックライド スラッシュ！」

ディエンドCFのブラストと、ディケイドFCのスラッシュがダークティケイドCFに放たれるがダークティケイドCFはバックステップで避けて行く

「やつぱり…避け方も同じか…！」

「何…？」

そこに背後に回っていたディエンドがディエンドライバーで撃つ

「くつ…何故だ…」

「テル君の同位体なんだから、根本的な所は同じなんだろう? だつたら行動も読み易い。中学からの付き合いだしね」

「アタックライド ブラスト！」

「はい…！」

「わづ！」

余裕ではないようだが、軽い口調でダークディケイドCFに言い放つ。二後、ザイニンガはグラス、ミ占用して吉田ミミラ

「おりやあ！」

「小癩な！！」

そこにはティケイドロードとティエンドロードの蹴りが入るが、それを避けるとすぐにパンチをティエンドロードに決め、さらに回し蹴りでディケイドロードをティエンドの元に蹴り飛ばす

「アタックライド ブラスト！」

そしてダークディケイドブластでディケイドPFCとディエンド、さらにディエンドCFを狙撃していく

「三二七、ハジハナ、ハナツヨ。」さあ、始つてうござ

二二九

ダークディケイドCFを睨むテル。だがその表情には辛さを感じ得なかつた

「ハア…ハア…。ああ、良いだろう。決着を…つけるぞ…！」

「そ
れ
テルがライドブッカーから取り出したのは金色に光り輝くカード

「ファイナルレジョンドカメンライド デイ・デイ・デイ・デイケ
イド！」

金色のボディ。紅と翠のオッドアイとなつた複眼。純白の翼。ヒス
トリーオーナメントは各ライダーの紋章となつた姿。仮面ライダー
ディケイドレジェンドコンプリートフォーム

「あまり長くは变身できないんでな…。一回だ。一撃での真剣勝負、これで決めるぞ」

「いいだろう…負けた方は…消える…」

「ディケイドレーザーとダークディケイドレーザーは自身の必殺技のカードを、ディケイドライバーもしくはダークディケイドライバーのバッフル部にセッターし、叩く

「「ファイナルアタックライド」」

「「はああああ…」」

ソードモードになつたライドブッカーに、ディケイドレーザーはマゼンタと金色の力を、ダークディケイドレーザーは黒と青の力を溜めて行く

「何だこりや…」

「空気が…震えている…？」

「つ…。テル君も加減無しか…」

「ディケイドレーザー、ディエンドレーザー、そしてディエンドはなんとか起き上がつて状況を確認する

「そういうえば門河の奴、無意識に加減したつて言つてたな…」

「はい…。一回マジ切れしたときに完全解放をやつちやつて…」

半径1km以内が焦土と化しました

「それって大丈夫なのかい？」

「この工場は総面積60平方km。テル君とゼロの必殺技が本気でぶつかり合つた時に発せられる衝撃の有効範囲はユキタ力の試算だと半径3km。恐らく大丈夫です。ただしこれはあくまでも通常対コンブリの試算。コンブリ対レジンドだと…単純計算でも半径10km…ですかね」

「結構危険だね…だからといって周辺住民の皆さんを避難させるわけにはいかないか…」

「無理ですね。たまに万部としての活動で一時的な退去を願つた事はありますけど…、今回は私情なんで無理です」

軽く異常なことを言つたディエンドだったが、三人はそんな事も気に留めず、ディケイドレーザーとダークディケイドレーザーの方を向く

「ゼロ…今一度問う、何故そこまで本物にこだわる？」

「さあな……それが俺の本能なんだよ……」

「… そ、うか。 な、らつ…！」

「ディケイド」のFは翼をはためかせて、目の前に展開されたホログラム

ラムカードをぐぐり抜けて行く

— 終わらせるぞ!!

ダークティケイドCFもまた走り出し、ホログラムカードをぐぐり

拾遺

卷之三

「元」

ケイヒ!】

「シユ。二つの力が

死へがり命へが
その瞬間燃焼力返りを危険

「可とあつた!?

「 あそーです！」

ディエンドが指差した先には互いに背を向け合った状態で離れていた。

元々ケイドウの元とターケ元ケイドウの姿が

卷一

「テル君！」

最初に脇を二したのはテイケイトヨの用

卷之三

振り返り
勝利宣言を出そーとした矢先にター~~ケ~~ケイドウが
倒れる

「馬鹿……な……」

そのまま変身が強制解除され、ゼロは信じられないと言つた表情でうつ伏せに倒れる

まるで時代劇の果たし合いをながらの決着の付け方だった

（））

「…ゼロ」

変身を解除したテルはゼロに歩み寄る

「…俺の負けだ…お前の好きにしろ」

仰向けになつて目をつぶるゼロ。死ぬ気なのだ

「…お前…俺に戻つてこないか?」

「何…?」

「ちよつ…テル君!…?」

テルの口から放たれた発言に目を丸くするゼロとエンマ。ゼロの出生を知つていてるエンマにしてみればそりやあ驚く事だらうが「エンマ、これは俺達の問題だ、黙つて!」

「う…うん…」

エンマを制した後テルはゼロに向き合つ
「ゼロ、お前は俺の破壊衝動から生まれた存在。俺の兄弟みたいなもんだ。だが、コウガやサヨミみたいな兄弟じやないつてことは分かつてる」

「だからどうした…?」

「その破壊本能を今度は押さえ込む!そのためには鍛えてきてるんだからな」

「ふつ…お前らしさ。結局、何時まで経つても変わらない物は変わらないか…」

「人間はそう簡単には変わらないよ

「ふつ…それもそうだ」

二人はひとしきり笑つた後、向かい合つ

「俺が戻ればお前が失つていたものも戻るだろ?」

「主に破壊に関する本能がな」

「 もうだ、同化する前にお前達に言つておきたことがある……」
セシルゼロの口からある言葉が放たれた

NEX T W & a m p ; O O O s i d e !

仮面ライダーOOO&W（前書き）

舞台はANGELETTA ATTACKから4年後、高校生活最後の年。戦いの中心にいた一つのカッフルが結ばれる前日に事件は起ころ。

これで決まりだ！
俺が変身する

ドイツ とある森林

ここに黒いマントを羽織った男と巫女装束を来た女性が来ていた
「ここか…」

「はい。ここにあの最高の鍊金術師であるガラが眠っているのです
「成る程な。…行くぞ、奏」

男が取り出すのは鋼色のメダル。それを自身の影に投入する。その
瞬間、影の形が変わって行く

「…来い、鋼！」

「闇より深き融炉より出でし…」

奏と呼ばれた女性の声音が少しづつかされて行き、機械のような重
低音になっていく

「其は科学の槌の鍛えし玉鋼！」

影より現れるのは鋼色の巨人、機械仕掛けの悪魔であり最強の機巧
魔神鋼^{マキーナ}。だが機巧魔神は全て非在化した筈だった

「やれ」

鋼の腕に重力球が作り上げられ、それを地面上に叩き付ける。そこに
は…

「メダル…のような蓋か」

「夏目君、どうしますか？」

「決まってるだろ。こじ開ける」

鋼が再び動き出す。蓋をこじ開けようと、両端を持つて引っ張り上
げた。その瞬間

「つー？これは…！」

「セルメダル？きやつ！？」

蓋を開けた場所から大量のセルメダルが溢れ出してきたのだ。そし
て巨大な塔を作り上げて行く

「何が！くつ…、鋼を戻すぞ！」

「はい」「

夏田と呼ばれた男の影に鋼は戻つて行く。そしてその場を離れようとした所に…

「しまつ！？」

「夏田君！」

二人は塔から現れたセルメダルの腕に拘束されてしまい、そのまま塔に引きずり込まれる

そして、塔を中心として円が描かれ、まるで大地がメダルのように浮かび上がって行つたのだった：

仮面ライダーOOO&W WEDDING 将軍と21のコアメダル

所変わつて日本 第3新東京市内

「授業やつと終わつたー！」

「和葉、まだ午前中だぞ？」

スマートブレインハイスクール。世界の融合の前にはファイズの世界にあつた高校だが、今は再構成の世界リ・イマジネーションが融合したこの世界にある。そして教室から出てきたのは、4年前のANGEL ATTACKにおいて仮面ライダー オーズとして戦つた夏田智春の義妹である苑宮和葉と、仮面ライダーWの片割れ翡翠セツナである

現在時刻は午後12：45分。丁度お昼休みの時間帯のため生徒達は購買に向かつたりお弁当を広げたりと思い思いのことをしていた

「おーい！セツナ！和葉！」

「お昼食べよ！」

そこにお弁当を持ってきたのは温和な感じの少年と金髪碧眼の美女。少年の方は仮面ライダーW及び仮面ライダー・ジョーカーとして戦った碇シンジ。少女の方は仮面ライダー・イクサとして戦った怒流アスカである。ちなみにカップルまたはバカップル、正確には婚約者どうしである

「そうだな。あ、今日弁当作ってないんだった…」

セツナは幼い頃から一人暮らしで弁当は自分で作っているのだがたまに寝坊とかその他諸々の要因で弁当を作つてこないときがある。今日はたまたまその日に当たつたのだ。といつても、落胆しているセツナに救いの手は差し伸べられる訳で

「セツナ、お弁当多めに作つてあるからね」

「和葉、お前はエスパーか？」

「いいじゃないの。…たまに作つちゃうんだよ…お兄ちゃんの分」

「トモ兄か…そういうばつどうしてるんだううね？」

「連絡ないし、手紙を送ろうにも住所不定だもんね…」

和葉の口から出てきた言葉から、仮面ライダー・オーズであった少年、夏田智春の話になる4人。弁当食べなくていいのか

「あ、でも悪いな和葉」

「いいつてこのくらい」

「早く食べよ。時間無くなつちやう」

「そうね」

すぐに話題を切つたあと、4人は教室でお弁当を広げるのだった

さてそれから数時間後。学校も終わり部活に行く者は部活に行つたり、部活の無い者は帰宅したりと思い思いの放課後を過ごすことになる

「それじゃあ、部室にいこいつよ」

「だな…朱津姉も来てるだろうしな」

「奏先輩もじやない?」

「ミサ姉…は今日は休みか」

「うん」

シンジ達4人が向かっているのは化学準備室…もとい科學部の部室である

「こんにちはー」

「あ、みんな来たんだ」

「何でここにいるの?ミサ姉」

「気にしてアスカ。私も呼び出されたから」

「大体分かつた…朱浬さんか…」

「ご名答!流石はセツナね」

セツナの咳きの後タイミングを測つたかのような絶妙なタイミングで化学準備室に入つてくるのは科學部部長である黒崎朱浬だ。セツナは呆れたように

「どうでもいいです。それで何のようなんですか?」

「ええ。それが直貴さんから連絡があつてね、危ない事が起こるから対処してくれつて内容の」

「なんというアバウトな…」

朱浬のアバウトさに頭を抱えるメンバーだが、兎に角そんな事は行つてられない

「市街地に出てみましょ。何か分かるかもしれない」

「それじゃあ、僕とアスカ、それにミサ姉が調査に出るから…セツナは集めた情報から検索をお願いしたいから残つて。和葉も残つてくれる?何か嫌な予感がしてならないからさ。あとカナ姉や樋口先輩、それにニアにも状況説明をして待機してもらつて」

「分かつた」

アスカの提案を聞いた後シンジが細かい計画を決める。朱浬は基本的に傍観者だ。実際、第3生徒会の王立科学狂会の会長も兼任しているのだから部活をしている暇も無いのだろう

「それじゃあ、出発!」

操縦の号令で、シンジ、アスカは化学準備室を出て行つた

「大丈夫なのか…嫌な予感がしてならない…」

（）

第3新東京市市街地

「にしても…平和だね」

「4年前が嘘のようね…」

とりあえず「手に分かれようという事になり、操緒は一人で、シンジとアスカが一人でそれぞれ見回りをしていた
災害は忘れた頃にやってくる。まさにその通り、それはいきなり起
こつた

「シンジ！あれ…！」

「えつ…！？」

いきなりシンジとアスカの目の前に線が引かれる。そして浮かび上
がつて行くのだ

「そんな…まさか…」

そして反転するとまた元の位置に収まって行く。そこにあつたのは…

「森？」

「これつて黒森！」シユバルツバルト

「知ってるの？」

「ドイツにある森林よ。植林したモミの木が密集して生育している
ために黒く見えるの」

「何かあるのかもしね、急！」

「ええ」

シンジとアスカは走り出した

「これつて…」

「おい、操緒！何が起こつてやがる！？」

「アンク！よくわからないけど…何かが起こつてるんだよ…」

「まあ、いい。嫌な予感がする行くぞ」

操緒と合流したアンクも森に向かつて走り出した

そして内部に入ると、中心に立つて いる塔のよつたな建造物からナイト兵が大量に現れる

「さてと… それじゃあ久しぶりに行きますか」

シンジはダブルドライバーを腰に巻く

『シン、 どうした?』

「まつ、 いろいろあるんだよ」

「ジョーカー！」

『まあいいや。 和葉、 僕の体頼むぞ』

「サイクロン！」

化学準備室にいるセツナとダブルドライバーを介して話をした後、 それぞれのガイアメモリのガイアウイスペーをならす

「アンク！ メダル！！」

「ちつ、 無くしたらただじゃ置かねえからな！」

現場についた操緒とアンク。 操緒はアンクから赤黄緑のメダルを受け取るとオーブドライバーを腰に巻き、 メダルをセット、 そしてオースキヤナーでスキヤンする

「「「変身！」」

「サイクロン！ ジョーカー！」

疾風と切り札の協奏曲が辺りに鳴り響き、 シンジは仮面ライダーWサイクロンジヨーカーに

「タカ！ トロ！ バッタ！ タツトッバ、 タトバ、 タ・ト・バ！」

奇妙な歌が流れ操緒は仮面ライダー オーブタトバコンボに変身した

『 そういえば、 アスカさんは変身しないのか?』

「あー、 それがママに取り上げられちゃって…。 嫁入り前の娘が戦うんじやありません！ つてさ」

『 そういえば、 今日が6月5日だから… 明日かシンとアスカさんの結婚式つて』

「 そう言う事。 アンク、 アスカのことお願ひね。 いくよ！』

「うん！」

WCJとオーブTTBはナイト兵に向かつて走り出す

「はつ！はつ！」

『シン！3時の方向から来てる！』

「了解！」

WCJは戦い慣れしており、複数戦も数多くこなしているため次々とナイト兵を蹴散らして行く

「どうやら、ヤミー擬きみたいだね。セルメダルが出てきた」

『だな。シン、一掃するならこっちの方が良い』

「オッケー」

WCJが取り出したのは黄色のメモリ

「ルナ！」

そしてサイクロンメモリとルナメモリを交換してバックルを開く

「ルナ！ジョーカー！」

幻想の切り札、ルナジョーカーになつたWは右半身を「！」のようこ伸びして攻撃する

「決めるよ！」

WCJはジョーカーメモリを右腰のマキシマムスロットに差し込んで叩く

「ジョーカー・マキシマムドライブ！」

正中で分離すると、ルナサイドが分身して連續攻撃を行なう。そして

『『ジョーカーストレング！』』

ジョーカーサイドのパンチを叩き込み、一気に周りのナイト兵を一層した

「行くよ！」

「サイクロン！ジョーカー！」

Wは再びサイクロンジョーカーになりナイト兵を倒して行く

「はつ！はつ！」

一方オーブTTBは若干ぎこちない動きながらも着実に敵を倒して

行く

「操縦！このメダル使え！」

「オッケー！」

アンクが投げたのは緑色のメダル。それをオーズドライバーのタ力メダルと交換する

「クワガタ！トラ！バッタ！」

頭部がクワガタヘッドになつた亞種形態ガタトラバになる

「はつ！！」

オーズGTBはクワガタヘッドからの電撃でナイト兵を倒して行く

「次だ！」

アンクはさらに黄色のメダルを投げる。今度はバッタメダルと交換してスキヤンした

「クワガタ！トラ！チーター！」

脚部がチーダーレッグになり、ガタトラーターになつたオーズはチーターレッグのスピードを生かして走り出し、トラクロード切つて行く

「今度は…これだ！」

次に投げられたのは青のメダル。今度はトラメダルを取り替えてスキンヤンする

「クワガタ！ウナギ！チーター！」

腕部がウナギアームになつた亞種形態ガタウーダーになつたオーズはトップスピードを維持したままウナギウイップとクワガタヘッドのW電撃で次々とナイト兵を蹴散らす

「よつと！」

「タカ！トラ！バッタ！タツトツバ、タトバ、タ・ト・バ！」

オーズTTBに戻ると、そのままメダジヤリバーでナイト兵を蹴散らして行く。だが…

『キリが無いぞ！こいつら…』

「どうすれば…」

倒しても倒しても増え続けるナイト兵達にさすがに戸惑いを感じる

WCJとオーズTTB、このままでは疲弊するばかりだ

「アンク！縁のコンボ！！」

「ダメだ！お前はコンボに耐えつる器じやない…。智春だったら任せていたがお前じゃ無理だ！」

オーズTTBの言葉にすぐさま反論するアンク。実際、智春は最初の変身の際にコンボを連続して使用したがまったく持つて疲労を見せていなかつた。だが操縦は初変身時にコンボを使った後疲労で倒れてしまつているのだ

「第一、この状況でコンボを使って倒れてみろ…。お前の命も危ないし、メダルだってどうなるか分からん！」

「…むう…」

明らかに劣勢は必至なのだが、それでも戦い続けるWとオーズだが、いきなり攻撃が止む

「何だ？」

『攻撃が…止まつた？』

そして塔の扉が開き、中から現れたのは古風な服を来た何かであった「800年の眠りから覚めたが…。欲望は無くなるどころか、増えておるな…」

『お前は…何者だ？』

少しエローの掛かった女性の声で喋る存在…その名は…

「我が名はガラ。欲望にまみれた世界を破壊し新世界の王となるものだ！」

ガラがそう言つた瞬間、辺りに風邪が吹き荒れた

「この世界を破壊する？世界の破壊者でも出来なかつたことをお前がか？」

『シン？』

「ざけんなよ！」

WCJはまるで怒りを繁栄させたかのような暴風を纏つた拳でガラに殴り掛かかる

「ぐつ…。成る程の…。だが！」

ガラはすぐに体制を立て直す

「まあいいだろ？ コアメダルは頂いて行くぞ」

ガラが持っている杖から風が吹く。それと同時に…

「しまつた！？ ぐつ！！」

アンクの持つメダルケースからコアメダルが全て奪われる。無事だつたのはオーブに使つてゐるタカ、トラ、バッタのコアメダルとアンクを構成してゐるタカ、クジャク、コンドルのメダルだけだ。だが…

「えつ… キヤツ…！」

オーブドライバーにはめ込んでいたメダルまでもがガラに奪われる

「ちつ！」

「そんな…」

それと同時にオーブTTBも変身解除。操緒はやはり戦闘経験が浅い分疲労で倒れてしまう

「オーブドライバーも貰うぞ…！」

ガラがオーブドライバーを拾おうとしたその時、紫色の何かがオーブドライバーを奪い去つて行つた

「何？」

一瞬だけ見えたのは恐竜グリードギルの姿。そしてギルはすぐに姿を変える

「トモ兄！」

「久しぶりだな。みんな」

恐竜グリードギルこと夏目智春。そして智春の姿を見たガラは

「まあ良いだろ？ 今回はこのくらいにしておこう」

塔の中に引き返して行つた

「何起こってるかは知らないけど… 鬼に角っこから出よ！」

『分かつてゐる』

智春の先導の下、WCJ、操緒、アスカ、アンクは森から出て行つた
シンジ達が森から出て行つた後、黒森のある地点は強固な結界に覆
われるのでつた

メダルの塔 内部

「つ……うう……」

「……？」

奏と夏目の一人は、玉座や石盤、実験器具のような物がある部屋で目を覚ました。自分達のいる場所は穴の上に浮いた板の上だつたがそして玉座に座っているのはガラである

「お前が、ガラか？」

「その通りだ」

夏目の問いに尊大な態度で返すガラ。そしてガラはセルメダルを実験器具のような物に投入する。すると、道化師のような格好をした少女が姿を現した

「ほう、グリードでも無いのにメダルから生命体を作れるのか」「私はかつて王に使え、コアメダルを作つた。我に不可能はない。」

「これを」

ベルと言つセルメダルの少女を2人作ったガラは、一人にはコアメダルを石盤にはめ込むように指示し、もう一人にはある命令を出したのだった

（）（）

第3新東京市 第3新東京駅前

黒森から逃げ出してきたシンジ達は智春に駅前まで連れて行かれた。ただ単に智春が荷物をとりにきただけなのだが。ちなみに智春の荷物はバースドライバー やバースバスター、それに着替えが入つたスリッケースだけというシンプルな物だ。財布は持ち歩いている

「トモ、いつ帰ってきたの？」

「昨日だよ。風の便りでシンと惣流の結婚式がもうすぐつて言うの

（）（）

を聞いたからや。まつただり? 一人の結婚式の時には帰つてくるつて」

高校生も終わりに近づき中学生の時とは違う雰囲気を持つ操縦の変化に若干戸惑いを見せつつもいつも通りの態度で接する智春だ。ちなみにさすがに成長しないのは拙いと感じているようで智春の外見上の年齢は操縦と同じになつている

「いや、ミサ姉が聞きたいのは何で連絡しなかつたのかつて事だと思つ…」

「あー、いや、その…」

シンジの指摘にしどろもどろになる智春。そこにアンクが鋭い一言

「智春、お前忘れてた訳じやないだろうな?」

「……」

「図星か」

とりあえず沈黙した智春は放つておいて、シンジはセツナに連絡をした後この後の予定を話し合つ

「とりあえず、制服だと目立つし一回学校に戻る。話はそれからだ」

「そうね」

と、シンジの提案で帰ろうとしたそのとき、いきなりベルの音がする

「何だあれ?」

駅前にいた人々が一斉に音のした方向を見る。そこには道化の格好をした少女がワゴン車を引いて歩いてくる姿が

『貴方の欲望をかなえるチャンスタイムです。100万円を手に入れる事が出来る代わりにあなた方には一生この髪型で暮らしていただきます』

少女の出したフリップには丁髷の絵が書いてあった

『イエスかノー でお答えください』

ワゴン車の中には100万円の札束がぎっしりと詰め込まれている

「100万円ねえ…」

「僕にしてみれば必要ないお金だし…」

「操緒にしても別に今すぐ欲しいっていうお金じゃないし…」

「というかあんなりスクを侵してまで100万円欲しくないわよ…」

あきれ顔のシンジ、智春、操緒、アスカ。アンクは智春が買つてき
たアイスを食べている

「あいつ、ガラの野郎が作り出してるな」

意味深な言葉を言いつつ…

さて、ワゴン車の方に目を向けると奇術師に一人の男が尋ねていた
「本当に100万円貰えるのか？」

『はい。ただし、一生この髪型で過ごしていただきます』

「ならイエスだ」

男の答えを聞いたとき奇術師はベルを鳴らす。それと同時に男の頭
がピンク色の煙に包まれて丁髷頭になつた

『どうぞ100万円です』

奇術師から100万円を受け取ると男は帽子をかぶる
び出したが、誰も気づく物はいなかつた

「こんなにこうやって隠しちまえば良いんだよ！」

だがすぐに帽子は飛んで行つてしまつた

『言いましたよね？一生その髪型で過ごしていただきますと。なの

で帽子等も使い物になりません』

軽く爆弾発言もあつた物の、本当に100万円貰えると分かつた人々はすぐさま殺到して行くのだった

その頃メダルの塔にある天秤の透明なタンクには次々とセルメダル
が溜まって行く。そしてその傍らでは奇術師がコアメダルを石盤に
はめている

「これは一体？」

「まあ、見ておれ。そうすれば分かる」

そしてタンクが満タンになつたとき、丸盤が裏返る

その頃、駅前では…

「なつ！？」

いきなり地面が丸く区切られたと思うと、アンク、シンジ、智春、アスカの4人と操縦が分断されてしまう

「一体何が！？」

「お兄ちゃん！？」

シンジから連絡を受けたセツナとついでに和葉が漸く到着。だがすでに地面は上空に上がつて、裏返つたのだった

「これって、トモ兄の荷物？」

「あ、オーナードライバーをトモが拾つた限りだつた！…」

「でもバースドライバーはあるよ」

操縦にはオーナードライバーと入れ替わりにバースドライバーが、智春はオーナードライバーが渡つてしまつたようだつた

「シンジがいなくなつたと考へると、Wも使えないか…。どうしたものか」

セツナはメダルの塔がある地点を見据えて呟いた

（～）

「嘘だろ…」

シンジ達が見た光景。木造の家々や長屋、そしてそれを見下ろすかのように立つているのは立派な天守閣を抱く城

江戸時代にタイムスリップしたのだった

江戸時代にタイムスリップしてしまったシンジ、アンク、智春、アスカの四人。さらに駅前にいた一部の人々も巻き添えを食らつたらしく、江戸の街に不釣り合いな乗用車が停まっていた。さらに事態は深刻なようで…

「あれって…」

「お…おめえら、どつから来た…！」

「分からねえよ！それよりここのはどこだ！」

「はあ？将軍様のお膝元、江戸だよ！」

江戸時代の人々と現代の人々とのいざこざが起こっていたのだった

「どうした物か…」

「まあ、こ愛嬌つてことで」

シンジとアスカはその状況を楽観視していた。まあ、タイムスリップした人達と過去の人達のいざこざはある意味お約束だが

「でも、止めた方がいいよね。この時代だつたら死人がでるかも…」

「しょうがないか…」

時は江戸時代である。武士なんぞ介入してきたらそれこそ死人が出る事態になる。智春の意見にシンジは賛同し、いろんな物が飛び交う中に割つて入つて行くのだった

（）

さて、メダルの塔の中では夏目とガラが話していた

「成る程、時空を入れ替えるのか。そういうれば、ここもそれで移動してたな…。そして江戸時代…あの髪型はそう言つ訳か…と、そこに奇術師がベルをならしてくるが…」

「俺はあの髪型にはならないからな？」
すぐさま拒否するのだった

「ふむ。残るはクジヤクとコンドル。それに紫メダルか…」

そういうとガラはまたもセルメダルを実験器具のようないれ。すると今度は猿、虎、狸、蛇の特徴を持った合成ヤミー、鶴ヤミーが誕生した

「ヤミー…か」

「ゆけ。コアメダルを回収してこい」

ガラがそう言った後、鶴ヤミーの足下にメダルのような紋章が展開され、鶴ヤミーは転送された

（）

という訳で江戸時代。シンジと智春は現代の人々と江戸時代の人々の争い（？）を止めに入っていた

「まあまあ。皆さん落ち着いてつて」

「そうですよ。そんな争つたつて何にもならないですつて」

「そんな事言つてもよおーあんな格好してりや怪しむに決まつてんだろ！」

「俺達は人間だつて、何回言えば分かるんだ！」

どちらにせよ止める事は困難だろう

「ダメダメこりや

「…この感覚…ヤミーだ！」

「え？」

アスカはもはや諦めたような表情で笑い、アンクは険しい表情で智春とシンジに告げた。その瞬間、メダルのような紋章が現れ鶴ヤミーが現れる

『オーズ、アンク、コアメダルを貰うぞ…』

左腕にある髑髏を動かして喋る鶴ヤミー。それを見たアンクは

「おい智春！お前、コアメダルはどうした…？」

「あー、ごめん。荷物と一緒に置き去りにしちゃつた…。あ、でもトラとバッタはあるよ」

「タカはどうした！」

「ごめん。どつかで落とした」

「おい！」

智春に尋ねたが、見事にコアメダルが足りず戦闘不可。とりあえずコアメダルを持っている智春とアンクが戦闘を行なうのはかなり難しいようだ、となると…

「俺だけかよ…」

「ごめんねシン」

必然的にシンジに役割が回る事になる

「リングはあるし、大丈夫か」

シンジはロストドライバーを腰に巻き、紫電属性のリングを指にはめ炎を灯し、ジョーカーメモリのガイアウイスパーをならす

「ジョーカー！」

「変身！」

「ジョーカー！」

切り札の音楽と雷撃が一つになる。Wに似ているが、黒と紫が基調となりセントラルパーテーションが存在せず、所々が刺々しくなり、角はWを模した物にさらに一本追加されている。仮面ライダー・ライジングジョーカー、ANGEL ATTACKにて多くの戦績を残した仮面ライダーである

「さてと、久しぶりにいきますか！」

碇家に伝わる宝刀・紫電（メモリの力でその柄の部分にはマキシマムスロットが追加されている）を構えて鶴ヤミーに切り掛かる

「はっ！はっ！」

『よつ』

だが流石は猿のモチーフが入っているだけはあり、素早い動きでRジョーカーの斬撃を避ける

「碇流斬魔術一式…」

紫電に紫色の力が溜まって行く。無論紫メダルの力ではなく、ジョーカーメモリの力だ

「魔斬一刀両撃！！」

紫電を一気に高速で振り下ろす。流石に対処出来ずに鶴ヤミーがセルメダルをまき散らしながら吹っ飛ぶ

「うわああああ！？」

周りにいた人々は怯え、逃げ惑っているのである程度人的被害は押さえられる。…筈だつた

『ふん！』

体勢を立て直した鶴ヤミーの口から放たれた火炎弾がRジョーカーに放たれる。Rジョーカーなら避けられる攻撃だつたが

「ぐわあああああ！！」

避けなかつた。後ろには隠れていた江戸時代の人々の姿があつたからだ

「ぐ…」

「シンジ！」

「今出たら危険だ」

アスカはRジョーカーに駆け寄ろうとするが、すぐに智春に引き戻される

『コアメダルを寄越せ！』

鶴ヤミーは左腕の髑髏をアスカ、智春、アンクが隠れていた場所に放つ

「ちいっ！！」

アンクは何故か分離可能な右手を飛ばして対抗するが…

『ぐつ…があつ…！』

力負けしてしまい、クジャクとコンドルが奪われてしまつ。この時点でアンクの中にはクジャクとコンドル。そして自身を意志があるタカメダルだけとなる

『貰つて行くぞ』

メダルのような紋章が鶴ヤミーの足下に現れ、鶴ヤミーは消えた

「つ…う…」

何は逃れたが、シンジは軽く火傷を負い、アンクもコアを奪われた

が故に若干苦しかった

（））

所変わつて現代。一回、学校に戻つたセツナ達は科學部のメンバーに狀況を説明。丁度科學部のメンバーもニコースを見て向かおうとしていた所らしくセツナ達は科學部一行を現地に連れて行くのだった

「ほー、凄いなこりや」

ショバルシドルツ

一応部長代理である樋口は黒森ショバルシドルツのある場所に張られた結界を見て目を輝かせていた

「この中に碇君達がいるんですか？」

「それが違うの。シン達は今、行方不明。トモとアンク、それにアスカも…」

嵩月奏の問いに操緒が返す。和葉はセツナと共に結界の破り方にについての検索を始めている。

「おい、操緒ちゃん。今なんて言つた？」

操緒の返答を聞いていたのか樋口が操緒に問いかける

「え…それにアスカも…」

「その前」

「トモとアンク？」

「智春が戻つてきてるのかよ！」

操緒がさらりと言つていたので嵩月は気づかなかつたようだが、智春が帰つてきているという真実をじこで科學部のメンバーは初めて知つたのだった

「トモ兄の事は後でしてくれ。今は別次元に飛ばされたシン達がどうすれば戻つて来れるのか。それと、この結界はどうしたら破れるのか…。つてあれは！」

セツナが指示した方向には空中に上がる地面の姿が

「おおお！何が起こつているんだ！」

「これで2つ目…。次はどこと繋がるんだろ…？」

大騒ぎする樋口と険しい表情の和葉であつた。ちなみにこの時入れ替わったのは恐竜時代まつただ中のアメリカだつたことを追記しておく

「で、翡翠。なにか分かつたのか？」

「一応ですけどね。あの結界には一部分だけもうい所があります。そこに強力な一撃を…例えるならば黒鐵の黒の剣撃や白銀の白の剣撃に相当するくらいの。弱くともダメージが蓄積されればどうにかなりますけどね」

アストラ・マキーナ

ここで機巧魔神の話題が出たが、今この世界には機巧魔神はない。となると必然的に仮面ライダーの力が一番有効なのだ

「オーズドライバーさえあれば、機巧魔神コンボで何とかなつたかもしれないのが…しょうがないか」

「どうします？」

「とりあえず力ナ姉、焰月を使ってみて

「分かりました…。焰月！」

嵩月の持つネックレスより現れるは灼熱の炎で作り上げられた刀。嵩月家の守り刀・焰月。悪魔の存在しないこの世界では死ぬ気の炎と同じような原理で悪魔の能力と同等の力が發揮されるようになつてているらしい

ともかく放たれる地獄の業火の一撃はセツナが示したポイントに向かつて行くが…

「ダメか」

パワー不足なのがどうなのが分からないうが結界には特に何の変化も無かつた

「兎に角、シン達が自力で戻つてこよつがこまいが結局この結界は壊さなきやならないし、いろいろ試してみよつ

セツナの主導の下で科學部は結界の破壊の方法を探すのだった

所変わつて江戸時代

とりあえず騒ぎが一段落すると、またも始まつていた。見た所力ゴ
やらざるやらが飛び交い、車を盾にして防御したりといろいろやつ
ているようだ

「皆さん、落ち着いて」

「お…お前だつて人なのか！あんな姿になりやがつて！」

「それにそつちの男の腕！い…一体なんなんだ！」

「え…」

シンジが止めに入るが逆に怯えられる一方だ。どうも不可抗力だつ
たとはいえ変身したり怪人化したりしたのは拙かつたのか

「まあ待て。彼らは危害を加えたりしない」

そんな状況で江戸時代の人々をいさめたのは一人の武士だつた
「だけど新さん…」

「思い出してみろ。あの時、避けられる攻撃を彼は避けようとしな
かつた。人が後ろにいるという事に気づいてな」

新さんと呼ばれた武士の言葉に納得したのかおとなしくなつた人々。
そしてシンジ達に名乗る

「俺は貧乏旗本の三男坊徳田新之助だ」

「碇シンジです」

「惣流アスカです」

「夏目智春つて言います。で、こつちはアンク」

「見た所、そつちの人達も含めて日本人ではないな？」

「あー、まあ、そんな感じですかね…？」

「んなもんどうでもいい！行くぞ！」

徳田の問いに曖昧な返事をする智春。そんな智春の手を引いて、ア
ンクはその場を離れたのであつた

「ん？これは…」

その時落として行つたセルメダルを徳田は拾つた

（まさか…）

何か思い当たる節があつたのか、徳田もまたその場を去つたのだった

「アンク、大丈夫？」

「ちつ。コアを一枚持つてかれた。次に狙われるのは……」

「分かつて。僕の紫メダル」

紫の「アメダルを体内に宿したが為に恐竜グリードになってしまった智春である。次にガラが狙うのは紫：つまり自分のコアメダル

「そう言えば、トモ兄がグリードになつてるのは分かつてるけど、コアメダル何枚あるの？」

「ブテラ⁴、トリケラ³、ティラノ³の10枚。うち意識を宿したコアがブテラ」

本来なら9枚で誕生する筈なのだが、智春の場合は事例が特殊なためこうなつてているのだ。ちなみにコアが揃つているため完全な状態なのだが、とくに特別何かするわけでもない

「兎に角、今日の寝床を探そう。多分、今日一日で戻れるとは思わないし……」

「こ」の格好もなんとかしないとね」

とりあえず現代の格好は結構目立つ。どこか適当な所でこの時代の服を調達しなければならないのだ

「とりあえずさ、一回入れ替わった所に行つてみよう。知り合いかがいるかもしれないし」

シンジの意見で入れ替わった現代の地域に行つてみるとそこには……

「……天堂屋？」

駅前の商店街の一角もここに来たようで、運良くリイマジカブトである天堂ソウジの実家であるおでん屋天堂屋があつた

「中に入つてみるか……」

アンクが扉を開ける。すると

「いらっしゃい！おつ、シンジくんに惣流君、アンクも。お、智春君帰つてきてたのか？」

現代の人々だろうと江戸時代の人々だろうと、笑顔で接客する天堂

ソウジの姿があった

「いやあ、びっくりしたよ。何か空が回ってるなと思つたらいつの間にか江戸時代とはな。ははは！」

（そうだった、この人は何が起こつても動じない人だった）
流石は天の堂に座す男。滅多な事では動じないのだ

「で、何の用だい？」

「えーっと、見ての通りなんですが江戸時代にいると僕ら浮くんで、一晩泊めてもらつてもいいですか？」

「別にかまわないぞ？マコやおばあちゃんは買い物に出たから多分この事を知らない筈だし、今日戻れるという保証はないからな」

「ありがとうございます」

ソウジは快くシンジ達を泊めてくれるようだった

「それじゃあ、少しお店を手伝ってくれるか？俺一人だと大変だからなあ」

「あ、それじゃあ僕がお鍋見張つときます」

「じゃあ僕は接客つと。ほり、アンクも」

「ちつ、しようがねえな」

「惣流君も接客を頼む

「はーい！」

泊めてくれるのだからやつぱり樂するわけにはいかないと、シンジは厨房に、智春とアンクそれにアスカは注文をとり始めた。まあ結局はがんも、大根、卵のおでんしかないのだが

さてその一方で現代で結界を破壊するのに力を入れている科學部はと言つと…

「ファング！マキシマムドライブ！」

「ファングストライザー！！」

セツナがロストドライバーのファングメモリで変身した仮面ライダー・ファングが結界に対してファングストライザーを放つがまったく効果が見えない

「ダメですか…」

「みたいだ。樋口先輩、どうです？」

「んー、確実にダメージは入ってるんだけど、これと言つ決め手が無いんだよなあ…。もう少し出力が高ければ…」

「出力…か」

一瞬ファングは死ぬ気の炎の同調も考えたが今現在氷河属性のシモンリングを持つていない以上は使えない

「ツインマキシマムは危険過ぎる…。後考えられるとすれば黒鐵だが…今は使えないし、万が一使えたとしてもトモ兄がいないとな…」「バース・ディだつたら?」

ファングの呟きに和葉はそうこぼした

「バース・ディ… そうか！その手があつたか！！」

ファングは何かひらめいたかのように智春のスーツケースを開く
「バースドライバー…これなら行けるかもしねれない！」

「貸して、操縦がやる」

バースドライバーを腰に巻く操縦。そしてセルメダルを投入し…

「変身！」

グラップアクセレーターを勢い良く回した

「カポーン」

（）

所変わつて江戸時代。既に夜は明け朝になつていた

「また行くんだろ？頑張れよ」

「ありがとうございました、ソウジさん」

ソウジに見送られシンジ、アスカ、智春、アンクの4人はまた江戸の街に向かう

そして川に掛かる橋にさしかかった所で、鶴ヤミーと無数のナイト兵が姿を現した

『オーズ、お前のメダルを貰う!』

「そつはいかないよ」

智春はオーズドライバーを腰に巻き、トラビットバッタのメダルを装填する

「智春、一か八かの賭けだ。それを忘れんじゃねえぞ?」

「分かつてるつて」

アンクはそう智春に念を押す

「ぐつ！」

そしてアンクはコアメダルだけの姿になる。タカメダルは智春の手のうちへ、クジャクとコンドルはアスカの元に飛んで行く

「行くよ…アンク！」

タカメダルをオーズドライバーに装填し、オースキャナーでスキヤンする

「ジョーカー！」

シンジもジョーカーメモリのガイアウイスペーを鳴らし、ロストドライバーを腰に巻いた後、ジョーカーメモリを装填する

「変身…！」

「タカ！トラ！バッタ！タツトッバ、タトバ、タ・ト・バ！」

「ジョーカー！」

オーズTTBとRジョーカーはそれぞれメダジヤリバーと紫電を握るとナイト兵の大群に突っ込んで行く

「はつ！はつ！」

「てやつ！」

ナイト兵一体一体はそれ程耐久力や力がある訳ではなく倒すのは楽だが、それが束になるとなるとかなりの強敵である。ましてやそこに鶴ヤミーもいるのだ

「碇流斬魔術二式・地獄霸斬撃！！」

Rジョーカーは紫電を地面に突き立てる。それと同時に広範囲に渡つて衝撃波が発生しナイト兵をセルメダルに還元する

「くそつ、数が多い！」

「このままじや…キリが無い！」

オーズTTBとRジョーカーだけでは手が足りない。このままでは体力の消耗やらで負けるどころか、智春のコアメダルも奪われてしまう

「どうすれば…」

そう言いながらも倒して行か無ければならない状況である。次々とナイト兵を蹴散らして行くがキツい物があると、そこに蹄の音が聞こえてくる

「徳田さん？」

「助けにきたぞ。まあ」

徳田新之助。だがその身なりは貧乏旗本の身なりではない

「徳川家の家紋…成る程ね」

Rジョーカーは何かに気づいていたがあえて口には出さないようだつた

一人だけではあるが戦力が増えた。やはりいるといないので大違いで負担は少なくなる

「危ない！」

だがナイト兵が女性を攻撃しようとする…が

「おりやあ！！」

現代の男性が女性を助けた

「俺達もやるぞ！」

「「「おおー！！」」」

一般人の皆さんも物干竿やら何やらを持つてナイト兵に応戦していく

「うむ、皆味方だ。思う存分戦え」

「はい！ありがとうござります！」

徳田も日本刀を抜刀し、峰打ちではあるがナイト兵を倒して行く

「トリプル！スキニングチャージ！」

「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

「せいやああああああああ！」

「碇流斬魔術奥義：雷龍爆炎翔！！」

オーズバッショと雷龍爆炎翔がナイト兵を一掃した。それとほぼ同

じときにほぼ全てのナイト兵が全滅した

『そんな…馬鹿な…』

鶴ヤミーは逃げ出して行く

「逃がさない…」

「いくぞ…」

「はい…」

オーズTTBはライドベンダーに、徳田は馬に飛び乗り鶴ヤミーを追つた

『このお…』

「はっ！」

鶴ヤミーの攻撃をうまくいなしてからオーズTTBはトラクロード一撃を加える

「ヨーロッパの王家から徳川家に献上された物だ！受け取れ！」

徳田は懐から箱を取り出し、中についた橙のコアメダルを智眷に投げる

「コアメダル…でもなんで？」

「これだ」

さらに徳田が取り出してみせたのはあの時落として行つたセルメダルだ

「これを見たときにはピンと来たんだ」

「成る程！：それじゃあ

オーズTTBはオーズドライバーに橙のコアメダルをセットし、オースキヤナーでスキヤンする

「コブラ！カメ！ワニ！」

橙のコアメダルは爬虫類の動物達の力が込められたメダル…

「ブラカワニ…」

どくろを巻いたコブラの姿を模したコブラヘッド。亀の甲が腕に装着されたカメアーム。そしてワニの歯を模したワニレッグ

オーズの爬虫類系のコンボ、ブラカワニコンボだ

「こくよー。」

ワニレッグにオーラングサークルから力が込められる

「はつ！ はあつ！」

そして鶴ヤミーを蹴つて行く。それと同時にワニの顎のよつたエフェクトが展開され鶴ヤミーを噛み砕く

『この！…』

鶴ヤミーは左手の髑髏に紫色の炎を纏わして飛ばすが…

「よつと」

両腕のゴウラガードナーを合わせてガードする技ゴーラシールデュオを発動してガードする。それにより髑髏は破壊されると、そうすると形勢不利と見たのか鶴ヤミーは火炎弾で攻撃する

「うわつ！？」

オーズBKWは横に回避する。そして笛を見つけた

「蛇嫌いではないいんだけ…なんかね。まあ仕方ないが」

そしてその笛を吹くとゴブランヘッドからゴブランが現れる

『…』

鶴ヤミーも首に巻き付いている蛇で応戦するがこれもゴブランの勝ちである

「成敗！」

「スキヤーングチャージー！」

地上を滑るように移動しながら橙色のオーリングをぐぐり抜け…

「せこやああああああああああああああ…！」

鶴ヤミーの目の前で飛び上がりオーズを包み込むように現れたワニの頭部のようなエフェクトを纏いながらはさみ蹴りを鶴ヤミーに炸裂させた。

オーズブラカワー・コンボの必殺技ワニングライド。鶴ヤミーは爆発しメダルになる

「やつたねトモ兄」

遅れてやってきたRジョーカーは変身を解除する。オーズBKWも変身を解除してから徳田に向かいつ

「ありがとうございました」

「なあに。頑張れよ」

徳田：いや、暴れん坊將軍徳川吉宗公は馬に乗り江戸城へと戻つて

行つた

これで決まりだ！・俺が変身する

メダルの塔

「くつ、まさかこれ程とは…」

「さすがは僕の弟だな」

ガラは鶴ヤミーが倒されたところを見て焦り、夏目は悠長に構えていた

「だがもうすぐ最後の天秤が動く！…そうすれば世界は終わりを迎える！」

そういうて天秤の方を見てみると、タンクの中のセルメダルは後少しで満杯になる所まできていた

「それで、君に相談なんだが」

「なんじゃ？」

夏目はガラに対してこんな提案をした

「最後のセルメダルを智春…いや、オーブから手に入れてみないかい？」

「ほう…」

夏目提案にガラはしばし考えた後

「ほほほほほ！面白い！オーブの欲望で世界を終わらせるか、それもまたよいのう。いいじゃろう」

ガラは奇術師を呼び出すとメダルのよつた紋章を奇術師の足下に展開して奇術師を転送した

（）

所変わつて江戸時代

アンクはあの後ナイト兵と鶴ヤミーが残したセルメダルを集めで口アメダルを投入することで復活した

智春達はとうとともに戦つてくれた人々にお礼を言つていた

「ありがとうございました」

「おかげで助かりました！」

「いいつていいつて」

とりあえず現代の人々も江戸時代の人々も楽しそうにしており、無駄な争いはなくなつたんだと一安心していた。とそこにベルの音が鳴り響く

「…お前は！」

現れるのはガラが送り出した奇術師だ

「あなた様の欲望のチャンスタイムです。元の世界に戻れる代わりにここにいるすべての方々が消えてしまいます」

智春に対して問いかけを行う奇術師。その問いに周りの人々がどよめく

「イエスかノーでお答えください」

「トモ兄…」

シンジは智春のことを心配そうに見つめる

「少しいいか？」

「何でしうか？」

智春は奇術師にこんな問いを投げた

「僕だけじゃ何の意味もないんだ。この三人も一緒に…」

「ご家族ですか？」

「そんな…ことかな？」

智春がだした案は自分でなく、シンジとアスカそれにアンクも一緒に戻れるのならというものだつた

「ではいいでしう。ご家族の皆様が戻れる代わりにそれ以外の方々が消えてしまします。イエスかノーでお答えください」

問いかけを訂正して智春に尋ねる奇術師。どちらにせよ周りはどよめく

「…トモ兄！」

「私たちだけ残つたつて何にもならないでしょ！」

シンジとアスカは反論するが智春は聞き耳を持たない

「みんな僕たちを助けてくれたんだよ……」

「…僕の答えは…」

智春が出した選択は…

「トモ兄！」

「イエスだ」

イエスだった

「ほほほほほほほほ！」

メダルの塔でガラは大笑いする。そう智春がイエスと言つた瞬間にタンクには大量のセルメダルが落ちてきたのだ

「皆様、これにてサービスを終了させて頂きます。この世界の『』利用誠にありがとうございました」

現代の世界では奇術師がテレビを通じて世界の終わりを告げた

「そんな…」

「和葉！まだあきらめるな！もしこれを答えたのが、トモ兄かシンだつたら…」

和葉は絶望した表情になるがセツナはまだあきらめていなかつた。セツナにはしつかりとした確証があつたのだ

「トモ兄かシンだつたら…世界を終わらせるようなへまはしない！」一つは江戸時代につながり、二つ目は恐竜時代につながつた。そしてもう一つの時空が歪もうとしていた…が

「なんじゃ！これは…！」

なんとタンクは満杯になるどころかセルメダルが溢れ出したのだ。ガラは驚愕の表情になる

「さすがは僕の弟だね」

夏田は満足げな表情になつていた

「どういうことじや！貴様…！」

「ふふふつ」

夏田は意味深に笑うだけだつた

「……あれ？」

「消えてない？」

シンジとアスカは恐る恐る目を開けた。広がった風景は見慣れた現代のものではなく、まだ江戸時代だった

「そん……な……」

「僕の欲望をかなえるんだろ？」

驚く奇術師に智春は軽く笑いながら答えた

「それなら僕の欲望はこんなんじゃ満たされない。紫グリードでもある僕の欲望はね」

紫が司る欲望は無。満たされていない状態が満たされているという矛盾した存在なのだ。だからこそ……

「常に無だからこそいくら満たされても満たされないんだよ。まあでもこれで僕の欲望は叶つたんだけどね」

「え……？」

「いつただろ？ 家族も一緒にって。僕にひとつでは世界中のみんなが家族だと思ってる。僕が誰か一人を家族と思えばみんなが家族なんだよ」

「そ……ん……な……」

智春の説明を最後まで聞いた後奇術師は跡形もなく消え去った

「馬鹿な！」

「ははははは……さすがは僕の弟だ。まさに欲望の王、欲望は世界を救う……！」

メダルの塔ではガラは憤慨した様子で智春達の状況を見ており、夏田はといつと高笑いして智春を賞賛した。いや、欲望をか

（）（）

「ありがとうございました……！」

時空が元に戻つていいく。メダルのように切り裂かれた時空がまた元

の状態に戻つていつたのだ

そして元の世界に戻ると、近場にあつた三台のライドベンダーをバイクモードにして智春、シンジ、アスカはそれぞれ乗つた

「あ、そうだ。アスカ、これこれ渡しておくよ

「え？」

シンジがアスカに渡したのは自分が持つてゐる一つ目のロストドライバーと第1~4使徒との戦いのときに惣流クラウスの幻影より渡されたスカルメモリだ

「イクサシステムはキョウコさんに取り上げられてるんでしょ？内地だよ？」

そうアスカに言つた後、シンジはダブルドライバーを腰に巻く

「セツナ、聞こえる？」

『シンか？ 戻つて来れたんだな？』

「なんとかね。結界を破れる？」

『ミサ姉がバースに変身すれば何とかなるつぽい』

「それってC-LAWS・サソリのこと？」

『ああ。トモ兄には悪いけど、セルメダルを1000枚使う。もうくなるところができるからそこから一気に入り込め！』

「わかった

シンジはダブルドライバーを外す

「トモ兄、C-LAWS・サソリを使つてさ」

「オッケー。それじゃあ行くよ！」

シンジはロストドライバーを腰に巻き、ジョーカーメモリのスター・トアップスイッチを押す

「ジョーカー！」

智春はオーブズドライバーに漆黒、銀色、鋼色のメダルを順にセットする

「あれ？ トモ兄、それって黒、鋼色、銀の順じやなかつたの？」

「機巧魔神のメダルは特殊なメダルなんだ」

「へ？」

「すべてのメダルが、すべての部位に対応している。そしてこれが

機巧魔神メダルの本当のコンボ！」

智春はメダルをオースキヤナーでスキャン。シンジもジヨーカーメモリをロストドライバーのバッклにセットして倒す

「変身！！」

「ジヨーカー！」

シンジはいつも通りRジヨーカーに変身する

そして智春は…

「クロガネ！ シロガネ！ ハガネ！ クロガネッ！！」

コンボソングと共に智春のことをメダルのエフェクトではなく、漆黒の闇が包む

そして聞こえてくるのは奇怪な呪文。しかもそれはオーズドライバーから聞こえてくる

「闇より気高き欲望より出でし…其は科学の裁きを下す影！」

呪文が完成したのと同時に闇がはれる。そこにはオーズが立っていたがその姿は今までのどのコンボにも当てはまらない。辛うじて機巧魔神コンボのクハシガネに似ているが細部の形状が異なっている。まるでオーズの素体が機巧魔神・黒鐵の鎧を纏つたような姿。オーラングサークルはプトティラのように出っ張っている

漆黒の装甲に縁の色が赤のオーラングサークル、緑色の複眼を持つたオーズの姿

「仮面ライダー…クロガネオーズ！」

仮面ライダークロガネオーズ。機巧魔神・黒鐵と欲望の王オーズが融合した新たなる仮面ライダーと言つても差し支えのないライダーだ

「行くよ、シン！」

「分かつて。アスカ」

「何、シンジ？」

「アスカはミサ姉達と合流して。ここから先は僕とトモ兄でやるから

…分かつたわ」

アスカはライドベンダーを走らせた

「それじゃあ、行くよ」

RジョーカーとKオーブは大量のタコカンドロイドが作り上げる道を上っていく

「エネルギー充填完了！！」

「カボーン・ドリルアーム・クレーンアーム・ショベルアーム・キヤタピラレッグ・カッターウイング・ブレストキャノン」

操縦の変身した仮面ライダーバースはバースドライバーにセルメダルを1000枚投入してグラップアクセレーターをまわす。するとバースCLAWSがすべて現れてサソリのような形状をとった。これがバースの支援メカCLAWS・サソリだ

「行くよ！」

CLAWS・サソリは尾の部分に虹色の力を溜め込むとセツナが見つけたもろくなっている部分に一気に放つ。すると結界にひびが入っていく

「ジョーカー！マキシマムドライブ！」

Rジョーカーはジョーカーメモリを紫電にセットしてマキシマムドライブを発動させた

「ライジングライダースラッシュ！？」

その一撃で結界は破壊され、RジョーカーとKオーブはメダルの塔の最上階に乗り込んだ

「はっ！」

最上階を警護していたナイト兵を蹴散らし、Kオーブはガラの前に立ちはだかり、Rジョーカーは夏目と奏を助け出す

「大丈夫ですか？」

「ああ。なんとかな」

奏は未だに寝ているため夏目だけがRジョーカーの問いに答えた

「ならないです。早く脱出してくださいね」

そういうとRジョーカーはKオーブの横に立つ

「さてと、ガラ…だつたけ？」

Rジョーカーはガラに向かいいつのも決め台詞をいう

「さあ、お前の罪を数えろ……」

「科学の審判をお前に下す！」

さらにKオーツも即興であるう決め台詞をガラに対して言い放った

「ふん！貴様らに負けるほど、私は弱くないわ！」

そういうとガラはタンクから溢れ出したセルメダルを吸収して怪人態となる。そしてガラは長い腕を使ってKオーツとRジョーカーを吹っ飛ばすと自身も下におりた

「うおおおおおお……」

Rジョーカーは紫電で切り掛かっていくが、強固な外装の為に効果があるとは実感しにくい

「シン！離れる！」

Kオーツは右腕に重力球を作り出す

「せいやああああああああああああああ……」

黒鐵の技もある黒の拳撃がガラ怪人態に直撃する。威力は相当なものであり外装じひびが入つたと思うとそのいひびからセルメダルが溢れ出す

「ば…馬鹿な！」

すぐに傷口を塞いだが、Rジョーカーはあることに気がついた

「今一瞬、人の手が見えた」

「やつぱりな。あいつは人間を取り込んでいるんだ。セルメダルを取り込めたのも、肉体がないのにこの世界に復活できたのも、人との存在を取り込んだからだ。グリードで言うコアメダルの役割を果たしてるんだろうね」

「それじゃあ…中にはいる人を助けないと…」

「ああ。ガラは倒せない」

「その通りじゃ……」

ガラは腕をのばして攻撃してくる。Kオーツはいくつか重力球を作り上げて軌道をそらすことで回避し、Rジョーカーは身軽なフットワークでよけていく

そしてＫオーズは空間の一部を切り裂き、機巧魔神・白銀が使用している刀を取り出す

「こいつでもう一回ガラに傷を作る」

「つまり…」

「その傷から一気に引きずり出せ！」

「分かった」

Ｒジョーカーはいきなり変身を解く

「聞いてたろ？セツナ。行くよ」

「ジョーカー！」

シンジが木陰に向かってそういうとダブルドライバーを巻き、ジョーカーメモリのガイアウイスペーを鳴らした

「ばれてたか」

「サイクロン！」

木陰から姿を現したセツナはサイクロンメモリのガイアウイスペーを鳴らした

「変身！！」

そしてエクストリームメモリが飛来する

「サイクロン！ジョーカー！…エクストリーム！」

シンジとセツナは仮面ライダーＷの最強フォーム、ＷＣＪＸに変身した

「行くよ」

Ｋオーズは刀を振るう。それと同時に空間の断層が発生し、ガラの外装が破壊される

「ぐおおおおおおお！？」

「いまだ！！」

そこにＷＣＪＸが走つて間合いをつめると、傷口から見えた人の手をつかんで引つ張つた

「ぐ…させるかああああああ…！」

ガラは必死で抵抗するが空間の断層に引きずり込まれないようにするので精一杯の状態で最強フォームに勝てる訳がなく、力負けして

しまい、取り込んでいた人……女性を引っこ抜かれてしまった

「よしつ！」

『トモ兄！』

「分かつてる！」

WCJXは女性を抱きかかえて跳躍してその場を離れる。それを確認したKオーズはメダルを再スキヤンした

「スキヤニングチャージ！」

「はああああああ……」

Kオーズの姿が変わる。漆黒の鎧に走っている金色のラインがすべて赤に染まり、背中には焰の翼が現れる。さあがらアスラクラインの世界で魔神相克者アスラクラインとつた夏目智春が自身の機巧魔神ドゥターである黒鐵と使い魔のペルセフォネが融合した姿である慟哭する魔神クラインド・アスラを模したような姿だった。そしてその右手には焰の刀焰月が握られている「闇より気高き欲望より出でし……其は科学の裁きを下す影！」

「せいやああああああああ！」

またもオーズドライバーから聞こえてきた呪文とともにKオーズはガラに接近。そして一気に下段からX字にガラを切り裂いた

「ぐわああああああああああ！」

その一撃はとてつもなく重く、ガラは吹っ飛ばされた

「やつた」

『それ以上にその力……実に興味深いな』

WCJXは意識を取り戻した女性をバットショットとスタッグフォンの案内で逃げるよう指示し、Kオーズの様子を見に来たが、そのときにはもう戦闘は終わっていた

「これで、すべて終わる……ぐつー？」

KオーズがWCJXの方を振り向いたとき、ガラの腕がKオーズを貫き、プテラ、トリケラ、ティラノのコアメダルが奪われる

「ぐつー！」

「トモ兄！」

『まだ生きていたのか……！』

メダルの塔。ガラは命からがらここに逃げてきて、石盤に智香より奪った紫メダルをはめ込む

「変…身…！」

ガラがそうつぶやくと同時にコアメダルがガラに取り込まれていく。さらにはたりのセルメダルをすべて吸収し、さながらワイバーンのような姿をとつた

『ぐおおおおおおおおおおおおおお…』

そしてメダルの塔を破壊しながら飛び立つ

『うわっ、何でもありかよ…』

「トモ兄、いける？」

「大丈夫だ」

「ライオン！トラーチーター！…ラッタラタ～ラトラーダー！」

Kオーブはオーブラトラーダーコンボにコンボチェンジするとライドベンダーを呼び出し、さらにトライドベンダーにしてから乗る

WCJXはマシンハードタービュラーを呼び出して乗る

そしてオーブRTTとWCJXはガラ怪物態に向かって飛行していった

NEXT FOURZE&EVAside!

仮面ライダーフォーゼ&EVANGELION（前書き）

ライダーが存在しない世界…。ここでは福音の巨人が世界を守っていた…。

しかし、ある一人の少年による世界の介入でこの世界のルールは脆くも崩れ去る。

そして現れるは、宇宙の力を宿したライダー

仮面ライダーフォーゼ&EVANGELION 奇跡の価値は

青春スイッチ・オン！

「たつく…あの馬鹿兄貴もいい加減にしてほしいよな…」

第9使徒マトリエルの襲来の翌日、門河テルの弟である門河コウガは自宅にある自身の部屋であるものを見つめながら一人愚痴つた
「この世界はライダーがない世界…だからこそライダーシステムを持つてきてはならないって言つたのは兄貴のはずなのにな…」

コウガが見ていたものはフォーゼドライバー。この世界ではない別の世界で起こつたANGEL ATTACKと呼ばれる世界征服をもぐろむゼーレとそれを阻止しようとする仮面ライダー達の戦い。このときコウガは仮面ライダーフォーゼとして戦いに参加していたその後フォーゼドライバーは調整のために兄であるテルが持つていつた筈なのだが、マトリエル襲来時にいきなり現れ

『この世界にライダーの力が必要になつた。コウガ、これをもつと

そういうつて渡してきたのだ。…一方的に渡されてテルはとつとと帰つてしまつたが

「まあ、愚痴つてもしようがないか。何が起くるのかは知らな
いけど…」

コウガは一度思考を中断して本棚の上においてある時計を見る。まだ登校までには時間がある。この後どうじょうつかと考えようとした矢先に扉が開く

「コウガ、ご飯つて言つてるでしょ！」

「ん？ああ、悪い。考え方をしててな」

入ってきたのは赤みがかつた茶髪をショートヘアにした少女、門矢マミ。彼女はテルの友人である門矢エンマの妹である。特に何も

ないのだがこの世界に滞在している

「まったく…」

「さてと飯だ飯だつと

まあとりあえず準備は後でいいかと考え、コウガは部屋を出るのだった

（）

「あ、コウガ。おはよ

「シンジか…相変わらず早いな…」

テーブルに料理を並べていたのはこの世界の主人公である少年、碇シンジ。そういえばあの世界にいたWの片割れも碇シンジだったなという関係ないことを心の中で考えつつコウガは並べられた料理を見る

「白米にみそ汁にほうれん草のおひたし、でもって焼き鮭か…典型的な日本人の朝ご飯だな」

「寝坊しちゃつてさ、時間がなかつたから」

「それでもこれだけ作れるんだから大したものだよ」コウガの言葉にはにかみながら返すシンジ。そこにフォローを入れるマミ。とりあえず平和だ

「そういえばアスカは？」

「あー、まだ寝てるんじゃない？」

マミの問いにシンジは困ったような表情で答えた。基本的にぎりぎりまで寝ているアスカである。ちなみに本名は惣流・アスカ・ラングレーというが何もどつかの再構成が集まつた世界にも同じような人間がいたが関わりはない

「んーおはよー」

噂をすれば何とやら、惣流・アスカ・ラングレー嬢ようやくお目覚めである

「あ、おはようアスカ。『ご飯できるよ

この家に住んでる全員が集まつたところで朝ご飯を食べ始めるのだった

（）

（）

はてさてコウガ達が平和な食卓を囮んでいる頃、特務機関ネルフの発令所は騒然となっていた

「どうなつているの？マヤ！！」

「分かりません！何者かによつて警備システムがハックされています！」

唐突にネルフの誇るスーパー・コンピューター MAGI がハッキングを受けたのだ。既にシステムの 7 割が奪われている
「くつ、ロジックモードに変更して時間を稼いで！」

「だめです！変更できません！！」

「そんな…。日向君！速やかにコウガ君達に連絡を！」

「りょ…了解…！」

リツコは MAGI を預かる最高責任者として対策を試みるがそんなのはお構いなしにハッキングは進行していく

「メルキオールがリプログラムされました！」

ついに MAGI を構成する三つのコンピューターのうちの一つが奪われた

『なーんだ、特務機関と聞いたからどれだけのセキュリティを持つているかと思えばザルじやねえか。つまんねえな』

「…へ？」

いきなりスピーカーから聞こえてきた声に発令所はシンと静まり返る

『こんなので使徒の殲滅とかできるなんて世も末だな…興ざめだ』

「あ…ハッキングがすべて解除されました」

なんとここまでネルフに攻撃をしておいてまさかの試合放棄である。そして発令所の入り口から堂々と入ってきたのは白衣をきた少年「こんなんじやこれの同型機に複数のハッキングを受けたらひとたまりもねえな。おい、構造を教える。俺が作り直してやる」

「き…君はいつたい…」

発令所に同窓と現れた少年にネルフ副司令冬月コウゾウは尋ねた

「俺か？俺の名は山谷ユキタ力だ。覚えておかなくていい。後がめんどくさいからな」

尊大な態度で名乗るユキタ力であつた。さすがに職員一同唖然呆然である

「門河コウガにあわせろ。俺はやつに用があるんでな」

悪びれもせずに命令口調で話を続けるユキタ力。ふざけるなどいたいところだが相手はMAGIを完全掌握しかけた人間である。つかつに逆らえない

「それなら大丈夫よ。さつき日向君がコウガ君達に連絡したから」「オーケー。ならいいだろ」「

リツコの言葉に満足したのかユキタ力は発令所を出ようとする

「待て！貴様、何が目的だ！」

静観していたゲンドウがユキタ力に言い放つ

「聞いてなかつたのか？門河コウガにあわせろといったんだ」

「なぜコウガ君にあおうとする…」

「決まつてるだろ…？」

ユキタ力はゲンドウ問いかけに対してこう言い放つた

「俺の知識欲を満たす…ただそれだけだ」

仮にも特務機関の司令に対して尊大に答えるユキタ力であつた

「それよりもどこか丈夫で広いところに連れて行け」

「えーとそれじゃあトレーニングルームがありますからそこにいきましょう」

オペレーターの一人である日向マコトはユキタ力をトレーニングルームに案内するのだった

（）

トレーニングルーム

朝食の途中で呼び出しを食らつたコウガ達はそれでもなお失火入りと朝食を摂つた後、コウガの判断でトレーニングルームにきていた

「ねえ「ウガ、ここでいいの？」

「ああ。俺の予想が正しければおそらくここに来るだろ?」

入り口前で仁王立ちする「ウガ。なぜかのの背中にはある恐怖の色が見えていた

「ここです…」

「ほー、なかなか広いじゃねえか

そこにトレーニングルームの扉がひらいて現れたのはユキタ力のそれを案内したマコトである

「それでは自分はこれで…」

「まで、戻るついでにここ」の技術者…いや、技術部の最高責任者を

読んでこい

「は…はい」

発令所に戻ろうとしたマコトを捕まえてさらに一つ指示を飛ばした後ユキタ力は畠然としているシンジとアスカを無視して「ウガに向き合つた

「よう、久しぶりだな」

「俺は永遠にあいたくなかったんですがね…！」

軽い口調のユキタ力に対して投げやりな口調で話す「ウガであつた「そういうなつて。今回お前にもきっと利益になるものだから」そういうつてユキタ力は想いでいたリュックサックをあおると中からスイッチを取り出した

「アストロスイッチ…」

そう、フォーゼの力となるアストロスイッチだつた。現在使用可能なのは1番のロケットから16番のワインチまで。さらにユキタ力が持つてきたのは、17番のフラッシュ、18番のシールド、19番のガトリング、20番のファイヤー、21番のステルス、22番のハンマー、23番のウォーターの合計7個であつた

「さてと、さつさとフォーゼに変身しろ。そしてスイッチを試せろ」

「命令形かよ…」

「… それでもギャラリーもいるし、ここは基本的にプライバシーを守つてくれないことは確かである

「… 戦うときに使わせて頂きます」

「今やれ」

「この状況で？」

「… 確かに無理か」

ただでさえ、仮面ライダーの存在を知らないシンジとアスカがいるのである。さすがにここで変身するのはまずいだろう

「ならいい。それと、こいつも作つてきた」

「何これ！ハンバーガーーセット！？」

ユキタカが取り出したものに興味津々のアスカ。ハンバーガーとポテトフライとドリンクである

「おい、カメラとシザースかせ」

「はいはい」

ユキタカはそんなアスカを無視してコウガにカメラスイッチとシザーススイッチを要求。そして自分の持つフラッシュスイッチをそれぞれハンバーガーー、ポテトフライ、ドリンクにセットしてスイッチを入れる。すると…

「何これ！シンジー見てみて！かわいい！…」

形が変わったのだ

「アストロスイッチの力で偵察などをを行う支援メカだ。カメラスイッチを使うバガミールにシザーススイッチを使うポテテヨキン、そしてフラッシュスイッチを使うフラシェキーだ」

胸を張つて解説するユキタカ。とりあえず役に立ちそうだなどと考えつつコウガはトレーニングルームに入つてきた気配に気づいた

「あ、リツコさん」

「あんたがこここの技術部の最高責任者か？」

「ええ、そうよ。自己紹介が遅れたわね、赤木リツコよ」

「さつきも名乗つたが改めて、山谷ユキタカだ」

二人の技術者はがつしりと握手をする。その光景を見てコウガは頭

を抱えた

(リツ「コさんだけでも危険なのに…さらにそれ以上の危険人物が…！しかもその二人が手を組むなんて…！…）

「コウガ、大丈夫？」

「多分…」

さすがに「コウガの心配をするシンジであった

「さてと、それでもつてさつきコンピューターをハックしたときに情報は閲覧させてもらつた。人形決戦兵器人造人間エヴァンゲリオンのパイロットは誰だ？」

「そこにいるわよ。コウガ君もその一人ね。ほら、自己紹介」

「あ、碇シンジです…」

「惣流・アスカ・ラングレーよ」

リツコに促されて自己紹介をするシンジとアスカ。ユキタカはそんな二人を見て一言

「こんな子供が乗ってるのか？」

「ええ。エヴァは子供…しかも14歳の少年少女しか動かすことができないのよ」

「なるほどな…」

さすがに冷血つて訳でもないユキタカである。自分たちよりも年下の少年少女が訳の分からぬ怪物と戦つているのだからそりやショックを受けるであろう

「まあでも、あいつよかましか…」

「同意」

ユキタカとコウガの脳裏には共通してある少年の顔が浮かび上がつていたという

「まあ、そんなことはどうでもいい。データによるとU2機関だけか？あの永久機関をプロトタイプの零号機以外に搭載したつてなつてたが？」

「ええ。そうだけど？」

「あれは理論上ならプロトタイプにも搭載できるようになつてた筈

だが？まさか出力を押さえていないとかないだろうな？

「ちょっと待つて、なんであなたがそんなことを知っているの？」

「それは…」

ユキタカとリックの会話にコウガが割り込んだ

「その人が、何やらいろいろな兵器や武装。それにS2機関の理論を構築した人間ですよ」

「それ本当なの？コウガ」

「嘘は言わない」

コウガの発言にシンジは恐る恐る尋ねるが、コウガはまるで諦めたかのような口調で返した

「ということは、あのヘルメットとかも？」

「ああ」

アスカも恐る恐るコウガに尋ねる。コウガはそれに即答した
「あんな簡単な理論が分からぬなんてバカだな。という訳だ。俺の観点から言わせてもらつがまだあれの出力は押さえられる」

「そうなの？」

「ついでだからこりこりやつてやる。技術部を全員集めろ、俺が直々に指導してやる」

「わかつたわ」

ユキタカはそう言った後コウガ達に言つ

「お前ら、学校はいいのか？」

「あー、そうだった」

珍しく真面目なことを言つたユキタカ。コウガは曖昧に返事をした後シンジとアスカにこういふ

「とりあえず行くか。マミやレイも心配してるだらうしな」

「だね。ほらアスカも。いつまで戯れてるの？」

「はーい」

コウガ、シンジ、アスカはトレーニングルームから出て行つた

「さてと、俺としては1週間以内に零号機へのS2機関の実装と大

「氣圏外戦闘用装備及び対空中戦闘用装備を完成・実装させたいんで
な。きりきり動けよ」
ユキタ力主導のもとネルフ技術部の大改革が始まつたのだった

「おはよー！」

「遅刻よ！アスカに碇君！それにコウガ君も！」

現在時刻は二時間目と三時間目の間にある休み時間である。悪びれもせずに堂々と教室に入つてくる三人に大して怒つたのは委員長である洞木ヒカリである

「あヒカリ、おはよ」

「全くもう…あれ？コウガ君は？」

「あー、屋上に行くつてさ」

登校早々屋上にサボりにいくコウガ。まあ実際の所コウガはこの世界の人間ではないのでこの世界で勉強する意味がないのだが…。それなりに成績もいいし

「おはよっさんセンセ。例のあれ絡みかいな？」

「まあ、そんなところだね」

シンジに話しかけてきたのはなんだかんだで親友と呼べる中になつた鈴原トウジである。ちなみに相方だった相田ケンスケは今現在コウガの手により病院送りにされている（マミの盗撮写真を売りさばいていたのが原因）

「それでもつてセンセはこのこと知つとるんかいな」

「え？何のこと？」

「最近な、怪物が揺るになると出没するらしいんや。聞いた話によると人間がスイッチを使って変身したとか言つてな…」

「スイッチで変身する怪物？」

「あ、知らんかったらええんや。ほないな授業が始まると席に戻るわ」

「あ、うん（まさか「ウガが？違うよな…」）」

屋上

コウガは一人でここにいた。そして腰にフォーゼドライバーを装着してスイッチを起動させる

「3…2…1…」

ベルトからカウントダウンが聞こえだす。そそいでゼロになると同時に

「変身!!」

レバーを押し込んだ。そしてコウガをカプセルの用なものが包み込みその姿を変えていく

宇宙服を思わせる白いボディにロケットを模した頭部。仮面ライダーフォーゼだ

「まずは、これだな」

とりあえずフォーゼは17番のフラッシュシュスイッチをフォーゼドライバーにあるロケットスイッチを入れ替える

「フラッシュ」

そしてスイッチを押す

「フ・ラ・ッ・シ・ュ・オ・ン」

フォーゼの右腕に電球ののようなフラッシュシュモジュールが装備される

「おつと」

かなりの明るさであたりを照らし出した。校庭で体育をしていた生徒がざわつきだしていた

「これはまずかったな」

今度は右足のランチャースイッチを14番のスマートスイッチと入れ替えた

「スマート」

そしてスイッチを入れる

「ス・モ・ー・ク・オ・ン」

スマートモジュールからは煙が吐き出された

「ロケット」

「ロ・ケ・ツ・ト・オ・ン」

フォーゼはロケットモジュールを使って空にあがるととりあえず適当なところまで飛んでいた

「危なかつた……」

フォーゼは変身を解除。そして「ウガはほかのスイッチを見てみる」「20番のファイヤースイッチはステイシング用のスイッチだな……。それだったら実践で使った方がより有効か」「ウガはとりあえず校舎に戻り、購買で時間を潰すのだった

（――）

そんなこんなで昼休み

「はいアスカ、お弁当。シンジ君の分も」

「ありがとうマミ」

「ごめんね。いろいろ任せちゃって」

「いいのいいの。ノープロブレム！」

アスカとシンジは弁当をマミから受け取ると屋上に上がった。それを物陰から見る影があった

（畜生……惣流さん……）

なにかスイッチの用なものを握った少年はシンジとアスカが仲良く屋上に上がるのを見ていたようだつた

「お前には消えてもらうぜ、碇」

少年はそのスイッチを押す。それと同時に闇が少年を包み込み、星座のような光が現れる。そして少年は獵犬座の怪人、ハウンドゾディアーツになつたのだった

『うおおおおおお……』

ハウンドゾディアーツは屋上につながる扉を破壊するとシンジに飛びかかる

「おつと」

ハウンドゾディアーツの武器は獵犬座の名にふさわしい俊敏性だが

シンジは「ウガに鍛えられた反射神經でその攻撃をよけたのだ

『碇…お前は惣流さんと仲良くしゃがつて…。お前じや惣流さんに

は釣り合わない!』

「釣り合う釣り合わないじゃなくて、互いの気持ちだと思つけどな
『なつ！？』

いきなり気配もなしにハウンドゾディアーツの後ろにコウガは立つ
ていた。腰には既に変身準備が完了したフォーゼドライバーがあった

「3…2…1…」

「変身！」

レバーを押してコウガは仮面ライダーフォーゼに変身する

「なにあのおにぎり頭！？」

「おにぎりつて…あれつて口ケツトじゃないの？」

「俺の名は仮面ライダー…フォーゼ…」

アスカとシンジは「ウガの変身に驚いていた。…主にフォーゼの頭
について

フォーゼは拳をハウンドゾディアーツに突き出して…

「タイマンはらせてもううぜ！」

言い放つた

『ちつ！』

「逃がすかよ！？」

「ウ・イ・ン・チ・オ・ン」

『ぐつ！？』

逃げ出そうとしたハウンドゾディアーツをフォーゼはワインチモジ
ユールで拘束する

「チ・エ・ー・ン・ソ・ー・オ・ン ス・パ・イ・ク・オ・ン」

「うおりやああああああああ！？」

さらに右足にチーンソーモジユール、左足にスパイクモジユール
を装備したフォーゼはハウンドゾディアーツを振り回して連続蹴り
を浴びせる

「おりやあつ！？」

そして地面に叩き付けるとフォーゼは口ケットスイッチを10番のエレキスイッチに変えてスイッチを入れる

「Hレキ H・レ・キ・オ・ン」

フォーゼの基本カラーが金色に変わり、手には専用武器であるビリザーロッドを持ったフォーゼエレキステイツにステイツチョンジした

「行くぜ！」

フォーゼESはビリザーロッドのコンセントを左側にねじ。そしてハウンドゾディアーツを斬りつける

『ぐつー』

ハウンドゾディアーツも負けじとニードルを飛ばしてくるが、

「シールド シ・ー・ル・ド・オ・ン」

フォーゼESは18番のシールドスイッチをオンにしてそれを防ぐ

「ガトリング ガ・ト・リ・ン・グ・オ・ン」

さらにガトリングモジュールを装備して一気に放つ

『ぐつー？ぐわあー！』

「決めるぜ」

フォーゼESはシールドスイッチとガトリングスイッチをオフにする。そしてエレキスイッチをビリザーロッドに装填する。そしてビリザーロッドから警告音のような音が聞こえてくる。そして：

「リミットブレイク！」

「ライダー100億ボルトブレイク！」

フォーゼESはハウンドゾディアーツに向かつて走り出す。そしてすれ違いざまに切り付けそれと共に強力な電撃を流した

『ぐわあああああああー！』

ハウンドゾディアーツは爆発。少年の姿に戻った

「まだラストワンじゃなかつたからいいか…」

フォーゼESはゾディアーツスイッチを回収すると…

「じゃ、そういうわけだ」

「ロケット ロ・ケ・ッ・ト・オ・ン」

ベースステイツに戻り、ロケットモジュールを装備して飛去ったの

だつた

「いつたい何だつたんだろ?」

「さあ? それよりもお弁当食べよ。時間ないわよ」

「だね」

フォーゼについては軽く流してシンジとアスカは弁当を広げた

……

さて所変わつてネルフ本部。ユキタ力による技術部の指導が始まつてからいろいろなところで技術部の面々がじごかれていた

「そこの出力はもつと押さえろ!..」

「え…これで限界です!..」

「いづすればいいだるうが!…これぐらい理屈が分かれば猿でもできる。お前は猿以下か!」

「いJ…ごめんなさい!..」

今はエヴァのプロトタイプたる零号機にS2機関を搭載するための実験なのだが、ユキタ力にしてみれば猿でもできることを特務機関の技術部ができないことにユキタ力は憤つていた

「それと、その肩の部分には何が入つてるんだ?」

「えーっと、近接戦闘用のログレッショブナイフと二ードルですが

……

「ふむ…あの狭いスペースに入れるのなら考えたな。…あれって何かしらの追加装備はできるのか?」

「今までだと、バッテリーパックが搭載できるようになつてました。あとはマゴロックスの鞘が…」

「よし、上出来だ。兵器に関して言えば十分だな」

ユキタ力は何か満足げな笑みを浮かべていた

「俺は飛行ユニットの完成状況を見に行く。サボってたら実験台にするからな?」

ユキタカの威圧にその場にいた全員が首を縦に振った

「それじゃあな」

ユキタカが白衣を翻して部屋を出ていったあと、緊張が和らいだ

「なんだろうな…あの威圧感は」

「赤木博士とはまた違うそれだよな…」

「どちらにせよ、実験台はいやですよ…」

「頑張りますか」

実験台にはされたくないという一心で作業に取りかかる技術部員であつた

「んー？電話か」

飛行ユニットの開発現場に向かつていたユキタカの携帯が鳴つた

「もしもしー？」

『あ、もしもし、コウガです』

電話の相手はコウガだった

「何のようだ？今忙しいんだが

『ゾディアーツスイッチが手に入つたんですけど…「速やかに持つて来い！！！」…わかりました』

最後まで要件を聞かずにコウガに命令したあと、携帯をきるのだった

「くくくく…この世界は俺の知識欲を満たしてくれそうだぜ…！！」

だいぶいつちやつてる田で不敵に笑うユキタカはそのまま飛行装備作成中の研究室に入るのだった

（ゾクッ…！…）

「どしたの？コウガ？？」

「いや、何か寒気がしてな…」

「大丈夫？」

「ああ。嫌な予感はするがな」

そのころ、悪寒を催すコウガがいたといなかつたとか

（…）

それから一週間後

「ほー、さすがはこの世界最高峰とも言える技術者集団。理論と原
理さえ分かつちまえばでいいじやねえか」

「あたりまえよ。エルフを甘く見てもらつて

あれから一周間、ユヰタカによつてじぶんかれた技術部の

が、ユキタカの目標通りにことは進んだようだ

そして今、技術部メンバーとユキタ力の目の前には既に試験運用段

階に入つた3機のエヴァンゲリオン空中戦用装備があつた
『レムノス機は白、アーヴィング機は黒、アーヴィング機は赤、ミザーリ機は青

「二枚、一枚、三枚あるでござる。正芥レギー共給は？」

「アシ」(アシ)がブレカーブルの電源ノッチを改造してHDMIギガを

送り込めるようにしたわ」

「オーケー。上出来だ。翼の収納は？」

「元々は非常電源が搭載されていた箇所に縮小して収納できるわ」
翼の収納に関してはエヴァ量産型を参考にしているようだ。量産型の存在はこの世界だと公にはなつていなか

「それじゃあ、搭載実験と洒落込みますか」

あらせんこんな時間なのね

「そうね」

現在時刻はちょうど帰りのH.R.が終わったところである。シンジ達の運命はいかに……？

333

ところねけでシング達はところとおりに歸つ支度をしていた

「門河！お前、また授業をさぼりおひでー！」のままでは進学できません

「別に……」の前も言ったと思いますが俺は進学するつもりはありません

せんつて

この前というのは教育相談…といつか三者面談のことである。コウガ達は名義上は副司令である冬月、レイはリツコが保護者なのだが、忙しい仕事の合間を縫つて一人とも参加してくれたのだ

「そうだとしてもな！」

「時間なんで帰ります。今日はネルフで実験があるので。失礼します」

担任の言葉を遮つてコウガは出て行つた

「あ、コウガ！待つてよ～！」

マミもまたコウガを追いかけて教室を出るのだった

さてネルフ本部

「あれ？今日は何にも実験がない日じやなかつたっけ？」

シンジはコウガが担任に向けて言い放つた言葉に疑問を感じていたようだ

「あー、それがな。ちょっと前にユキタカさんから連絡がはいつて今日、新しく新造したエヴァの特殊装備の実験をするらしい」「特殊装備？聞いてないわよ？」

「ええ。司令も何も言ってなかつたわ」

コウガの返答に首を傾げるアスカとレイだが、すぐにこうがは返答した

「そりやそうだ。ユキタカさんが陣頭指揮を執つて、技术部がこつそり開発してゐるんだからな。あと、零号機の起動実験もするそつだ。S2機関を搭載してな」

「なるほどね」

そんなわけで更衣室に直行するコウガ達であった

「零号機起動。S2機関稼働に問題なし。シンクロ率及びハーモニクス安定しています」

真つ先に行われたのはエヴァ零号機のS2機関搭載後の起動実験で

ある。結果は大成功である。そして…

「よし、初号機と式号機も起動させろ！出力にどれだけの差があるかを見てみる」

「了解！」

初号機と式号機も起動。なぜ参考機だけが免除なのかというと、エヴァの資料は基本的には参考機のパイロットである「ウガから渡されてきたからだ。必然的に参考機からのデータが多くなる。そのため参考機は今回の実験に参加していない。飛行用装備に関する参考機用は尽くされていないためこちらも免除である

ちなみに「ウガは今現在トレーニングルームでトレーニング中である。何やら太刀ぐらいの長さのある木刀を持っていたようだが気にしないこと

「ふーむ、出力は式号機とは20%、初号機とは40%違うのか。プロダクトも正式機なりの出力調整があつたようだな。初号機は試験機だからその分オーバースペック気味でも事足りる…か」

『エヴァンゲリオン全機、第3新東京市郊外に射出完了しました』

「よし、お前ら、コントロールレバーに新しく取り付けられているスイッチを押せ」

「え…？ああ、これか」

ユキタカの指令に戸惑いつつもスイッチを押す。すると背部装甲が浮き上がりそこから翼が展開された

「な…何よこれーー！」

「私…聞いてないわ」

アスカとレイは若干取り乱していた

「別に驚くほどのものじゃないと思うけど…」

一方、シンジは冷静に状況を把握していたようだ

「で、どうすればいいんですか？」

『んー？飛べ！って思えば飛べるぞ？』

「わかりました」

『おーい！早く測定の準備しろーー』

通信の向こうでコキタカが技術部の面々に激を飛ばしていたのはスルーして、シンジは心中で念じる

(飛べ…！)

その瞬間、木々をなぎ倒すほど衝撃と共に初号機の姿が消えたのだった

（）（）

一方、コウガは

「ふう…」

素振りを終えたのか、コウガは汗を拭うと壁にもたれかかって座る

「今頃、飛行ユニットの実験が始まってる頃だよな」

そんなことをつぶやいた矢先にスイッチケースが警報を鳴らす

「ん？」

コウガはケースを開くと、ディスプレイを起動させる。スイッチケースは携帯型の通信機にもなっているのだ

「ゾディアーツ？ その割には色が違う…？」

なぜかオレンジ色一色で染まつたカメレオンゾディアーツが第3の郊外にから歩いてくるのだ。しかも一体ではなくざつと見ただけでも100体近くいる

「ちつ、急ぐか」

コウガはトレーニングルームを飛び出ると、車庫に停めてあったマシンマッシグラーに乗って現場に向かうのだった

青春スイッチオンで宇宙キターー！！

「これって…まさか…！」

シンジと初号機はあの場所からあつといつ間に…

「宇宙に来ちゃつた…！？」

大気圏を突破して宇宙に来ていたのだった

「ほー、あの速度は第1宇宙速度を突破したな」

「凄いわね…」

発令所は啞然となっていた。ちなみにこの飛行専用装備に関しては事後報告という形でゲンドウを「ウガがおどり…お話して認めさせている

「なるほどな…」この力は我々には必要なものとなるだらう。コキタ力君、礼を言つや」

「別に、俺はただ自分の欲望を満たしたいだけだ。礼を言われるほどのことはしていない。おい、赤いのと青いのもさつれと飛べ。比較実験ができる」

『そんなこと言われても…』

いつになく弱気なアスカであつた

『それより碇君、戻ってきて』

『そうだね。えーっと、こうすればいいのかな?』

すると今度は初号機は宇宙から姿を消して地上に降り立つた

「ほう、まずまずの結果だな。これならたとえ敵が宇宙にこよひと…『大変です！インド洋直上の成層圏外にパターン青です…』…噂をすれば何とやら…か」

ユキタ力が何やら思案している時に使徒襲来の報告が技術部のオペレーターであるマヤからされた

「総員、第一種戦闘配置。エヴァ全機は速やかに武装を用意せよ」
ゲンドウの指示で速やかに戦闘準備が進められる発令所。そしてコウガから連絡が入った

『一から門河、現在芦ノ湖に大挙して押し寄せた怪物の進行を阻止中。今回の作戦式は日向一尉に一任してください。以上』

「というわけだ、日向一尉、頼んだぞ」

「はい』

「ちちはいつでもオーケーのよ」

「妙な予感はするが、一気に行くぜー。」

「3…2…1…」

「変身！」

マッシングラーに登場したままコウガはフォーゼに変身する

「さてと、使ってみるか」

フォーゼは口ケットスイッチを20番のファイヤースイッチに入れ替える

「ファイヤー」

「ステイツチエンジだ！」

「フ・ア・イ・ヤ・ー・オ・ン」

フォーゼを炎が包み込む。ボディの基本カラーが赤に変わり、複眼は緑色。そしてその右手には専用武器であるヒーハックガンが握られていた

「行くぜ！」

ヒーハックガンをカメレオンゾディアーツ擬の集団に連発をするとヒットしたカメレオンゾディアーツはすぐに燃え尽きてしまつた

「?どうなつてんだ?」

さすがに呆気ないと疑問を感じ得ないフォーゼFSだったが、ファイヤースイッチをフォーゼドライバーからヒーハックガンにセットする。そしてヒーハックガンから消防車のサイレンのような音が鳴り

り

「リミットブレイク！」

「ライダー爆熱シート！！」

圧倒的な炎の一撃で一気にカメレオンゾディアーツ擬が一掃された
「嫌な予感がするな……」

と、そこにレーダースイッチが着信音をならす

「レ・ー・ダ・ー・オ・ン」

左腕にレーダーモジュールが装備される。そして回線を開くとそこにはユキタカの姿が

『おい、今さつきステイツェンジしたる？』

「（なぜ分かつた！？）あ、ちゃんとデータは取つてあるんで」

『ならいい。後、まだ使ってないスイッチも出し惜しみするな』

「了解」

フォーゼFSはレーダースイッチをオフにするとファイヤースイッチもオフにしてベースステイツに戻る

「まだいるようだな……」

フォーゼの見据えるその先には新手の大群があつた

「今度はユニコーンゾディアーツか……」

それはユニコーンゾディアーツ。先ほどのカメレオンゾディアーツと同様にオレンジ一色に染上げられたものである

「今度は……これだな」

フォーゼはスイッチを取り出してあつた のソケットに10番のエレキスイッチを、そしてドリルスイッチを23番のウォータースイッチに入れ替える

「エレキ ウォーター」

「ついでにこれもだ」

さらにレーダースイッチも22番のハンマースイッチに取り替えた
「ハンマー」

「さて、出血大サービスだ！」

「エ・レ・キ・オ・ン ウ・オ・ー・タ・ー・オ・ン ハ・ン・マ・ー・オ・ン」

エレキスティックにステイツチョンジし、右手にはビリーザロッド、左足には蛇口のようなウォーターモジュール、そして左腕にはハンマーモジュールが装備される

「まあーーと…一気に決めるぜーーー！」

まず左足で回し蹴りを行うフォーゼE.S.。それと同時にウォーター モジュールから強力な水流が放たれ、辺りを水で濡らす。むりに、水流が直撃したゴニコーンゾディアーツ擬は消滅していく

「おつと、危ない」

そこに頭部をレイピアのようにしてゴニコーンゾディアーツ擬は攻撃を仕掛けるが、フォーゼE.S.は一とも簡単にそれをよけ…

「おらよーーー！」

ハンマー モジュールで叩き潰した

「次！」

ビリーザロッドのプラグを左側のソケットに差し込み、地面に突き立てる

「はっ！…！」

ビリーザロッドから放たれた電撃が水たまりを這ってゴニコーンゾディアーツ擬を消滅させていく

そしてフォーゼE.S.はビリーザロッドのプラグを真ん中のソケットに差し込んでからエレキスティックをビリーザロッドにセシートする

「リミットブレイク！」

「ライダー100億ボルトショート…」

ビリーザロッドから放たれた電撃を纏う斬撃がゴニコーンゾディアーツ擬を一掃した

「とりあえず、一段落したところかな？」

フォーゼはスイッチを全てオフにして変身を解除した

「さてと、発令所に行きま…んだありや？」

マッシュグラーに乗つて空を見上げたときに「ウガガは何かが見えたらしい

「あれは…まさか…！」

「 3 … 2 … 1 … 」

「 変身！」

コウガは再びフォーゼに変身する。そしてレーダーモジュールでどこに連絡を入れる。すると暫くしてからパワーダイザーという支援メカが現れる

「 タワー モード」

そしてビーグルモードからタワー モードに変形すると、マッシュグラードを乗せた

「 3 … 2 … 1 … 」 「 Let's Go!! 」

妙にいい発音でフォーゼが叫んだ後、マッシュグラードは宇宙に向かって打ち上げられた

（ ）

発令所

「 田標を光学カメラで捕捉。映像をモニターに回します」
オペレーターの手によりモニターに映し出されるのは、田舎のよつなデザインが施された空の使徒、サハクイエルの姿だった。だが、どうも様子がおかしい

「 常識を疑う形状だけど…」

「 ああ。何か違和感があるな」

リックとユキタカはすぐに察したようだ。そこにはコトドモが控えめに話しかけてくる

「 いいですか？」

「 なにもをかしづ？」

「 発進…」

「 さつさとしる」

ユキタカの返答を聞いたあと、マコトは軽く咳ばらいをして言い放つ

「 ハヴァンゲリオン、全機発進…！」

その号令とともに、零号機は白の翼を、初号機は黒の翼を、式号機

は赤の翼を羽ばたかせ、一瞬にして宇宙にあがつた

～～～

宇宙

「やつぱりな…」

ロケットモジュールを右手に装備したフォーゼは、自身の目の前にある使徒の姿をみて呟いた

「こいつ…アストロスイッチ…いや、ゾディアーツスイッチを取り込んでやがる…」

そう、リゾコやユキタカが感じていた違和感というのは、サハクイエルが純粹な使徒ではなく、別世界の産物を取り込んでいたがために、この世界の異端分子となっていたことだった

「それでもう一つは…」

フォーゼが後ろを振り向くと3機のエヴァの姿があつた

『『『ウガ！』』

「お前ら、くんじゃねえ！！」

レーダーモジュールで初号機からの通信を受けしながら、フォーゼはそう言い放つた。だが、時既に遅し

『何よ…これ…』

『私、聞いてないわ…』

『ちつ…！』

いきなり現れた銀色のオーロラがフォーゼと3機のエヴァ、そしてサハクイエルを飲み込んだのだった

フォーゼ&OOO&W&D C D (前書き)

それぞれの世界の物語いかがだつただろうか?
だが、まだ終わらない。世界の崩壊と終末を防ぐべく、三つの世界
の物語の中心が一つの世界に集まる

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー フォ
ーゼ&OOO&W&D C D NOVEL
大戦COSMO

「まず、この世界が崩壊しかけたのは事実だ。だが、それは今じゃない」

ここはテル達が暮らすディケイドの世界。闇と光、二つの人格を持つ少年の戦いは光の勝利で決着がついた。

敗北した闇…ゼロは、勝利した光…テルと同化する前に戦いの場にいた、エンマ、原点のディケイドである士そしてこそ泥こと海東に伝えることがあり口を開いた。それが冒頭の言葉である

「つまり…渡の早とちりつていう解釈でいいのか？」

「まあ、そう取つてもらつてかまわない」

あきれ顔のテルである。士と海東も少しあきれた表情になつていた
「てことは俺達の最後の旅つていうのも早とちりなのかな？」

「いや、それは真実だろう。現にお前は今存在が確認されているすべてのライダーとの絆を作つている筈だ」

「それもそうだな…」

ライダー大戦の世界から旅立つた後は既に通りすがったアマゾンの世界とBLACK RXの世界にBLACKの世界を除いた昭和ライダーの世界を旅しているのだ。当たり前だが一号と二号、三号とライダー・マンの世界は同じである

「そういうわけだ。さてと、テル」

「分かつてるって。でもどうやつて戻るんだよ」

「俺自身、この体を保つことはできない。人格が分裂したときと同じように、自然に同化していく」

少しつではあるが、ゼロの体が透け始める

「それじゃ、能力制御は頼んだぞ？」

『それぐらい分かつてている』

そしてゼロの体が完全に消え去り、残った光がテルの体の中に入つていった

「で、どうするの？ テル君」

「さあな。とりあえず、帰るか」

マシンディケイダーに跨がってエンジンキーを入れようとしたとき、いきなりオーロラが現れる

「オーロラ？」

「どうなってるんだ？」

「はあ… どうやら帰宅はまだ先らしいな…」

一瞬だけテルの瞳が輝き、オーロラが粉碎される

「一瞬だけだが、士、お前の世界が見えた。どうやらこの事件を解決しないと帰れないらしい」

「それは放つておけないな」

仕方ないと言わんばかりにテルはディケイドライバーを腰に巻き直し、士もディケイドライバーを腰に巻き付ける

「〔カメンライド〕」

エンマと海東もディエンドライバーにカードをセットし待機状態に入る

「「「変身…」」

「〔カメンライド ディケイド〕」

「〔ディエンド…〕」

「それじゃあ、さつさと行きますか。ゼロ」

『早速かよ…』

テルが変身したディケイドはさらにライドブッカーから金色のカードを取り出してケータッチにセットした後、コンプリートフォームに変身するときと同じようにバックルを外してケータッチを取り付ける

「〔ファイナルレジュンドカメンライド ディ・ディ・ディ・ディケイド〕」

「ディケイド」CFに強化変身するとライドブッカーをソードモードにして構える

「何をする気だ？」

「時空間を搔つ捌く。今までと違つて全能力が戻つてきてるから負担もない！」

「なんと言つチーー」

「ディケイドの言葉に對して軽く答える「ディケイド」」。そしていつの間にいたのか、ハルカがツツ「//」を入れた

「あれ？ ハルカ、なんでここに」

「あたしだつて万部の部員よ？」

「それ、理由になつてないし」

「まあ、いいじゃねえかエンマ。援軍は多い方がいいしな。でもつてカイオとカズヒトは？」

「そろそろくるんじゃない？」

「じゃ、おいてくか」

「おいてくな！」「」

サイドバッシャーに搭乗したカイオとマシンゼクトロンに搭乗したカズヒトも到着し、ユキタカ以外の万部の面々がそろつ

「よし、それじゃあ行くぜ！」

「ファイナルアタックライド」「ディ・ディ・ディ・ディケイド！」

「おりやあああああああああ！」

超強化ディメンションスラッシュによって空間に裂け目が現れる

「さてと、先に分担を言つておくが、カイオとカズヒト、それにハルカは向こうに着いたら別行動で科學部と合流してくれ」

「科學部？？」

「あー、この間の戦いで共闘したバースやイクサがいる筈だから」

「わかった」

『なに悠長に話してんだ。とつとと行くぞ』

ゼロの言葉でよひやくそこにいたメンバーは空間の裂け目へと足を踏み入れるのだった

とこりわけで士達の世界

『ふん！』

「とつ

『シン！トリガーメモリでいくぞ！』

「オツケー」

「サイクロン！ヒート！ルナ！トリガー！マキシマムドライブ！」

『『ビックカーファイナリュージョン！』』

駅の近くにある再開発地区にて、ガラ怪物態とWCGXは戦っていた。ガラ怪物態は翼がある割に飛べないのか地面を歩いて移動している。そのためハードタービュラーハードベンダーは現場に到着後近くに置いてある

「シン！セツナ！避ける！！」

威力重視のビックカーファイナリュージョンを受けよろめいたガラ怪物態の隙を見逃さずにラトラーターコンボからチエンジしたKオーズの黒の拳撃がガラ怪物態の脇腹を抉る

『ぐうう…！』

セルメダルが飛び散る中でそれと共に紫色のメダルが一枚排出された

「よつと」

奪われた智春のコアメダルである。トリケラメダルを取り込んだあと、白銀の剣を持ち、ガラ怪物態に突っ込んでいく

これだけを見ていれば、Wとオーズの圧勝に思えるが実際はそうではない

ガラ怪物態自体、巨大な体躯の持ち主であり、先ほど奪われたとはいえたまだ内部には20枚のコアメダルが取り込まれているのだ。実際のところ、ガラ怪物態にはあれだけの猛攻でも目立った外傷は与えられていない

『堅いな…』

『どうしようか？まさかクロガネオーズで漸くあれだもんね』

といいつつもWCJXはビックカーソードでガラ怪物態を斬りつけるも、目立ったダメージは無い

「はああああああ！」

Kオーツの白の剣撃によりダメージを『えるも決定打にならない。だが、またも紫のコアメダルが飛び出してくる。今度はティラノメダルだ

『成る程、メダルは本来の持ち主の所に帰つて行くのか』
「成る程ね」

だが、メダルは本来の持ち主の所に戻つて行くというのが正しければ、ガラが取り込んでいる赤のコアメダルはアンクの下に帰つて行くということになるのだが…

とりあえず一回体勢を立て直そつと、WCJXとKオーツはガラ怪物態から距離をとる

「どうしたものか…」

「セツナ、何か方法は？」

『ある事にはあるがな…』

「何？」

『オーツの全コンボの必殺技が一番有効みたいだが…』
「やつてみる価値はあるかな？」

セツナの言葉を聞いたKオーツは緑色のコアメダルを取り出した…
その時、いきなり空から何かが降つてくる

「ちょ…どけええええええええええ…！」

「『うわっ！？』」

とりあえず退避した二人、そして粉塵の中からロケットのようなライダーが現れる

「いてててて…。あれ？Wにオーツじやねえか」

『フォーゼ：だつたよな？』

オーロラに飲み込まれたフォーゼだった
何故墜落したのかというと、どうもこの世界についたとたんにロケットモジュールが暴走したらしい

『ぐおおおおおお…！』

「おわっ…なんだありや？」

痺れを切らしたガラ怪物態がフォーゼに尻尾で攻撃するがフォーゼは身軽な動きで避けた

W、オーズ、フォーゼの3人の仮面ライダーはガラ怪物態に向かつて行った

（）

さて、視点を居残りの科學部メンバーに移してみよう
アスカが合流してとりあえず帰ろうとした矢先に現れたゾディアーツ擬の大群を相手に戦っていた
ちなみに今度はアルターボディアーツとペルセウスゾディアーツである

「なんなのよ！こいつらは！…」

とりあえずまとわりついて来たアルターボディアーツ擬に肘打ちを喰らわすアスカはそう悪態をつく

「オレンジ色ってセンスないですよね」

「奏ちゃん、それいつたらおしまいだよ…」

嵩月は嵩月家の守り刀である宝刀焰月をふるい、バースはバースバスターを撃つ

「アスカ！」

「しまつた！」

相手の数が多く、変身出来ずじまいだつたアスカの背後にペルセイズゾディアーツ擬が回り込み、大剣を振り下ろそうとしていたが…

「スタートアップ エクシードチャージ」

黄色い閃光の一撃でそのペルセウスゾディアーツ擬は消滅した
それだけではない。次々とゾディアーツ擬が消滅していく

「3…2…1…タイムアウト リフォメーション」

「クロックオーバー」

「ふう…」

電子音声と共に現実空間に戻つて来たのはカイザとザビー。さらに

変身を解除した

「誰よ、あんた達」

「福沢カイオだ。 nice to meet you .

「吉山カズヒトだ。 よろしく」

アスカの問いに答えるカイオとカズヒト。 ちなみにカイオの口調は英語混じりなのが特徴である

「まあいいわ。 あんたらって何者？」

「私達の仲間… ってところかな？」

茂みの奥から出て来たのはサイドバッシャーに乗ったハルカ。 腰には二本の日本刀を差している

「ハルカさん！ 後ろ！！」

サイドバッシャーを降りようとするハルカの背後でアルターボディアーツ擬が巨大な火球を作っていた
だが、その火球は放たれる事もなく、アルターボディアーツ擬は消滅していた。 胴を真っ二つに切られて

「時雨、抜刀」

ハルカの手に握られているのは光に当たつて美しく輝く日本刀だった
「さて、惚けてないでさっさと終わらせましょうっ！」

「わかつてるわよ！」

アスカはロストドライバーを腰に巻き、スカルメモリのガイアウィスパーを鳴らす

（パパ… 力を貸してね）

「スカル！」

「9…1…3…スタン二ンバイ」

カイオはカイザフォンにコードを入力、カズヒトはザビーゼクターを呼び寄せた

「キバーラ！」

『はいはーい。 かづぶつ』

ハルカはキバーラを呼び指を噛ませた。 すると腰にベルトが巻き付く

「…変身…！」

「スカル！」

「コンプリート」

「ヘンシン チェンジワップス」

スカルはスカルマグナム、カイザはカイザブレイガン、キバーラはそのまま握っている時雨、バースはバーススター、嵩月は焰月を構え、専用武器の無いザビーは空手のような構えをとる

「さて、行こうぜおめえら！」Let's go!!!

カイザのかけ声のもと、それぞれ分散してゾディアーツ擬を消滅させていく

「カポーン ドリルアーム クレーンアーム」

「はあっ！！」

ドリルクレーンアームを装備したバースは次々と周りにいた敵を撃破していく

「カポーン カッターウイング」

カッターウイングを装備して空に舞うと…

「カポーン キャタピラレッグ」

キヤタピラレッグを装備。ドリルクレーンアームと共に上空からの攻撃を行なう

そこに飛行して来たアルターゾディアーツが現れるが…

「はっ！！」

スカルがスカルマグナムで撃ち落とす

「ナイス！アスカ！」

「余所見はいのちとりだからね！」

そうスカルはバースに言つた後、スカルメモリをスカルメモリに装填する

「スカル！マキシマムドライブ！」

「スカルパニッシャー！！」

スカルマグナムから連射される破壊光弾がアルターゾディアーツ擬の大群を消滅させて行く

「コンプリート」

一方こちらではカイザはアクセルフォームになり、カイザブレイガ
ンにはミッシヨンメモリーを挿す

「レディ」

「OK・カズヒト、光、行くぜ」

「はいはい」

「クロックアップ」

「スタートアップ」

カイザAFとザビーは高速移動を開始し、キバーラは時雨とキバ
ラサーベルを二刀流で構える

『ウェイクアップ』

「時雨蒼燕流攻式ハの型…」

「エクシードチャージ」

「ライダースティング」

「篠突く雨！」

アクセルカイザスラッシュにライダースティング、篠突く雨とソニ
ックスタンプが一掃するがついでに周りのものも纏めて一掃してし
まつた

「あーあ

「やつちまつたな」

「それよりもさ、分散させて戦うよりも一点に集めての方が効率い
いんじゃない？」

とりあえず罪悪感は感じるザビーとカイザ。一方、キバーラは何の
悪びれも無く別の作戦を提案していた

「なら…」

カイザはサイドバッシャーに飛び乗ると、コードを入力した

「バトルモード」

サイドバッシャーはバトルモードになると…

「おりやあああああ！」

ミサイルでゾディアーツ擬の集団を消滅させつつも一点に追い込む

「なにがしたいのかは大体分かったわ！」

「そうね」

「スカル！マキシマムドライブ！」

「カポーン ブレストキヤノン」

スカルはスカルメモリをマキシマムスロットに、バースはブレストキヤノンを装備してバース・ディになる

「セルバースト」

ブレストキヤノンにエネルギーが溜まつて行く

『ウェイクアップ』

「エクシードチャージ」

キバーラはキバーラにウェイクアップフルを吹かせ、カイザはカイザポインターにミッショントメモリーを挿してエンターを押す。ザビーもザビー・ゼクターを操作する

「－－－－－はああああああああああ－－－－－」

「ライダースティング」

スカルのライダーキック、バース・ディのバース・ディアタック、キバーラのソニックスタンプ、カイザのゴルドスマッシュ、ザビーのライダースティングでようやく全てのゾディアーツ擬を倒した

「やつた！」

「つ…疲れた…」

スカルはガツツポーズをして、バース・ディは膝をつく。だがキバーラにカイザとザビーはまだ気を抜いていなかつた

「まだくるわね…」

「ああ。だいぶしつこい奴らだな」

キバーラとカイザの視線の先にはオリオン、カメレオン、ユニコーン、ハウンド、アルター、ピクシス、ペルセウスゾディアーツ擬がいた

「しようがない…殺つてやるか」

体制を立て直したスカルとバースも参加し、戦いは続くのだった：

それでは視点を元に戻すとしよう

「だいぶでかいな…」

「そりなんだよね…」

フォーゼはガラ怪物態を見上げながら率直な感想をもらした
「とにかく、やらないと行けないってことに変わりはないか…」
そういういつつフォーゼはロケットスイッチをファイヤースイッチと
入れ替える

「ファイヤー フ・ア・イ・ヤ・ー・オ・ン」

フォーゼFSにステイツチエンジするとヒーハックガンで威嚇射撃
を行なう

「なんだこいつ…？ 見た目以上に硬え！」

「そりなんだよ」

Kオーズも重力球を幾つも飛ばして攻撃して行くがなかなかダメー
ジを与える事が出来ない

（ちつ…。これじゃあ使徒はシンジ達に任せるとしか無いか…）

フォーゼFSは心の中でそう思いつつもヒーハックガンでの攻撃を
続けるのだった

一方成層圏外ではエヴァ二機と使徒の激戦が続いていた

「こいつ… 見た目以上に素早い…？」

「ゴズミックエナジー… だつけな」

「なに？」

アスカの悪態に対し、ある事に気づいたシンジは咳き、それに気づ
いたレイがシンジに問う

「コウガが言つてた。フォーゼもゾディアーツもゴズミックエナジ
ーっていう宇宙の力を使ってるんだってさ」

「そりが… S2機関とそのゴズミックなんぢゃらがあるからこんな

に素早く動けるんだ！」

「コズミックエナジーよ、アスカ！」

兎に角ラチがあかないと零号機は装備していた陽電子砲ポジトロンライフルで使徒の注意をそらす

「碇君！アスカ！」

「上等！」

その一瞬の隙をついて式号機は装備しているマゴロク・E・ソードで切り掛かる。だが…

「つ…堅い…！？」

A・T・フィールドを中和しているにも関わらず高い防御力を發揮していたのだ

「確かに…」

マゴロク・E・ソードとカウンター・ソードの一ノ刀流で連續攻撃を行なっていた初号機も目立つたダメージを『えられていな

「ロングィヌスの槍さえあれば…」

「でも、今それは南極に沈んでるのよ？」

「分かつてる…。しかも、ここは世界が違う…」

攻撃が効かない、打つ手がない、しかも世界の勝手が分からぬ。完全に手詰まりの状態だった

「でも、やるしかない。私達の…エヴァの存在意義はそれなんだから」

「それもそうだよね…」

レイの一言でもう一度構え直す初号機と式号機。だが、またエヴァが手を下すことはなかつた。…何故なら

「そこをどけええええええええええ…！…！…！…！」

「「「え」」」

マゼンタとオレンジ色が混じつたようなエネルギー光線が使徒の右半分を消し去つていたからである

「ちょ、テル君やり過ぎ」

「あー、ゼロ、もうちょっと弱めでよかつた」

『今更言つか！貴様は！！』

その光線の放たれた先を見てみると、そこには純白の羽を羽ばたかせた金色の仮面の戦士とバイクのような乗り物にのったシアン色の仮面の戦士だった

もはや先ほどの会話でお分かりだらう。放たれたのは『ディメンションXX BURNER』であり、放ったのは『ディケイド』CF。そしてバイクはジェットスラッガーであり乗っているのは『ディエンド』である

「貴方達…誰ですか？」

「ん？通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

シンジの問いにいつもの台詞で答える『ディケイド』CF。そして腰にぶら下がっているライドブッカーをソードモードにすると切つ先を使徒に向ける

「今なら落とせる筈だぜ。わっせとやつちまえ」

「は…はあ

初号機はもう一度サハクイエルに接近すると二刀流を振り下ろす。すると…

「嘘つ…？」

簡単にサハクイエルは地上に墜ちて行った

「自己再生に力を向けていたからな。重力に逆らう力は最小限だつた。だから、それなりの衝撃を加えてやれば墜ちて行くんだ」

「でもさ、あの使徒つて確かに使徒自体が爆弾なんじゃ…」

「あー、大丈夫だろ。地上には土もいるし」

「いや、大丈夫じゃないって！」

「ちょっと一はどうするのよ！シンジ！」

「兎に角僕らも降りよう！」

急いで地上に降りるエヴァ二機を見送った後『ディケイド』CFはあるスイッチとメダルを取り出す

「そういえば、これをあいつらに届けておかないとな…」

「テル君、僕らも降りるよ」

「あいあいさーっと」

「ディケイド」CFと「ディエンド」も地上に降りて行つた

そして地上では…

「リミットブレイク！」

「ラ・ン・チ・ヤ・ー ガ・ト・リ・ン・グ リミットブレイク！」

「ライダー爆熱フルバースト…」

ヒーハックガンにファイヤースイッチを装填した後、さらにフォーゼドライバーのレバーを操作してリミットブレイクを発動。ヒーハックガンからは炎の弾丸、ランチャーモジュールからはミサイル、ガトリングモジュールからは大量の弾丸が一斉に放たれる

「はあああ…はあああああああ…！」

「サイクロン！ヒート！ルナ！トリガー！マキシマムドライブ！」

「『ビックカーファイナリユージョン！』」

さらにKオーブの白の剣撃とWCJXのビックカーファイナリユージョンも炸裂。ガラ怪物態の翼がもがれる

『ぐおおおおおおおおおお…』

ガラ怪物態は暴れ出し、尻尾で周囲のものをなぎ払つて行く

「とつ…わわ…？」

『フォーゼ！余所見しない方がいいぞ…』

「分かつてるつて！」

「そこだ！」

WCJXとフォーゼFSはうまく回避を行ない、Kオーブはといつ

とことも簡単に尻尾を受け止め…

「はああああああ…！」

そのまま投げ飛ばした

『ぐうう…』

さらに重力球で動きを制限する

「さてと、そろそろ終わりかな？」

Kオーブはオーブドライバーのメダルを緑色のメダルにチエンジする
「クワガタ！カマキリ！バッタ…ガタガタガタガタキリッバ、ガタ

キリバ！」

緑色のコンボ、オーブガタキリバコンボ参上。そして8人に分身する

「さてと、それじゃあ見せてあげるよ。僕らの力！」

8人才オーブGKBがそれぞれ違う種類のメダルをオーブドライバー
に入れてスキヤンする

「クワガタ！カマキリ！バッタ！ガタガタガタキリッバ、ガタ
キリバ！」

最初は緑のコンボ、ガタキリバコンボが

「ライオン！トラ！チータ！ラッタラタ～ラトラーダー！」

次に黄色のコンボ、ラトラーダーコンボ

「サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーゾ～サゴーゾ～！」

白のコンボ、サゴーゾコンボ

「タカ！クジャク！コンドル！タ～ジャ～ドル～！」

赤のコンボ、タジャドルコンボ

「シャチ！ウナギ！タコ！シャシャシャウタ、シャシャシャウタ
！」

青のコンボ、シャウタコンボ

「ブテラ！トリケラ！ティラノ！プットティラ～ノザウル～ス！」

紫のコンボ、プトイラコンボ

「コブラ！カメ！ワニ！～ブラカ～ワニ～！」

橙のコンボ、ブラカワニコンボ

「タカ！トラ！バッタ！タツツバ～タトバ！タ・ト・バ！」

そして王のコンボ、タトバコンボ

「~~~~スキヤニングチャージ！」

全てのコンボが一斉にスキヤニングチャージを行なう

「俺らも行きますか！」

「ロ・ケ・ツ・ト・オ・ン・ド・リ・ル・オ・ン」

フォーゼはベースステイツに戻り、ロケットモジュールとドリルモ
ジュールを装備する

「だね」

WCJXもエクストリームメモリを一回閉じ…

〔シテカレラムニテラシケシテ〕

〔日〕ケヌアニ＝ム！アザシマタコトイフ＝

「イタリ口ケツトトリ川キイイイツケ!!!」

「『アーティスト』はアーティストのアーティスト」――

- 1 -

フォーゼ、W、オーズの三大ライダーの必殺技をモロに受けたガラ
怪物態はメダルの山と化した…筈だった

『何か来る！避けろ！』

セツナの声が辺りに響いた刹那

卷之三

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

宇宙から巨大な物体が墜ちて来たのだった。

}{}

「これってサハクイエル!?」

フォーゼはその墜ちて来た物体に見覚えがあつた。第10使徒サハクイエルである

二二六

「シンジ、お前、どうしてうつ病だと？」

『…ねらう』

レーダースイッチに初号機から連絡が入った。とりあえず声のトーン

「金色のライダー……あんの馬鹿兄貴があああ

『どうしたんだ、フォーゼ』

「いや、なんでもない…」

頭を抱えるフォーゼは落ち着ひとつと深呼吸する。やつしていの間に上空から青、紫、真紅の巨人が降りて来た

「とにかく、さつさと殲滅してくれ。あのメダルの塊に」とどめを刺せない

そういうたのはタバコンボに統合されたオーズである

『そろはいかんぞよ…』

「な…！」

『こいつの力は凄い。私は氣に入った』

『ガラ！何をするつもりだ！』

メダルの塊と化していたガラが再び動き出す

『決まつておるじゃらう。こいつを取り込む！』

そうしている間にもサハクイエルはガラに飲み込まれる。そしてその姿はまたもワイバーンのような姿を形作って行く

『えええ…』

『反則だろ…』

『あんの馬鹿兄貴が…！…』

完全に融合したときガラの姿はワイバーンといつよりも巨大な竜の姿をしていた。それこそガラ使徒統合態。まさに世界を終末に導くものである

『ふん…！…』

『うわつ…？』

ガラ使徒統合態の口からから巨大な岩が吐き出される。初号機にあたるルートではあつたがギリギリの所でかわす

『ちいっ！どうすればいいのよ…』

『俺に聞くんじゃねえ！』

レーダーモジュールからは式号機に登場しているアスカの声が聞こえてくるが、フォーゼはそんなもの無視してガラ使徒統合態を睨みつける

『おいおい、主役の登場を盛り上げ過ぎじゃねえか？』

「士、僕もいることを忘れないでくれたまえ」

「！士先生！」

「よつ、碇、翡翠、それに夏田」

『今更なんのようだ、こそ泥』

「侵害だなあ。僕はこそ泥じゃなくて怪盗だよ」

『同じようなものだ』

木陰から現れたのはディケイドとディエンドである。しかもディケイドの手には見慣れないスイッチの姿が

「おい、兄貴じゃない方のピンクバーコード。そのスイッチはなんだ？」

「ディケイドはマゼンタだ！…まあいい。お前の兄貴からだぜ」

「…ロケットスイッチみたいだな…」

ディケイドがフォーゼに投渡したのはロケットスイッチに似たスイッチ。しかし配色はオレンジ一色でしかもロケットのような装飾がついている

「S - 1 …。ああ、兄貴が言つてたロケットスイッチスーパー1か

…

「その通りだ。弟よ」

「ちつ、馬鹿兄貴が…」

さらに上空からディケイドとCFも降りてくる

「それとオーブ！」

「はい？」

「このメダルを使いな！」

ディケイドとCFはメダルを投渡す

「へ？これって…」

金色のタカ、トラ、バッタのコアメダルである

「いいからさつさとしやがれ！あれを倒すんだろ？」

とにかくうだうだしていてもしょうがないと、フォーゼはロケットスイッチをロケットスイッチスーパー1に取り替え、オーブTTBもメダルを取り替えスキャンする

「ロケットスター」

フォーゼはロケットスイッチをオンにし、オーズもオースキャナーを胸の前に持つてくる

「ロ・ケ・ツ・ト・オ・ン」

フォーゼは基本カラーがオレンジ色となり、青色の複眼、そして両腕にロケットモジュールを装備した姿、フォーゼロケットステイツになる

「スーパータカ！スーパートラ！スーパーバッタ！…スー・パー！タトバ！タ・ト・バ！」

一方、オーズは「頭部はお馴染みのタカヘッドブレイブ」になり、胴部はトラアームが強化されたトラアームソリッドに、バッタレッグも強化される。そしてラインドライブとオーズスースの配色が逆となつたスーパータトバコンボになる

「へー、凄いじゃん。トモ兄」

『「どうか、あの配色についてのツッコミはほしくないのか…？」』

「とりあえず配色は微妙だがとにかくやるしかないと構える

「ファイナルかメンフォームアタックライド デイ・ディ・ディ・

ディケイド！」

「ファイナルカメンライド ディエンド！」

「ディケイドもパーフェクトコンブリートフォームになり、ディエンドもコンブリートフォームになる。むろん、海東である

「さてと、行きますか！」

「ディケイド」CFの一言で全員がガラ使徒統合態に向かっていく

WCJXはプリズムソードで、オーズSTTBはトラクローソリッドで、ディケイド」CFとディケイドPCFはライドブッカーでそれぞれ切り掛かり、ディエンドCFとディエンドはディエンドライバーでうち、フォーゼロケットステイツは「一つのロケットモジュールで殴り掛かっていく

『「僕たちも行くよ！」』

『「オーライ！」』

うん

初号機と式号機もマゴロクソードで切り掛かり、零号機もポジトロ
ンライフルで攻撃する

『ぐ……おのれえ！！』

二〇一〇年九月

そしてついに、オースSTTBはトラクローソリッドでライオン、カマキリ、ゾウ以外のコアメダルを奪い取る
さすがにこれには動搖するガラ使徒統合態はオースSTTBを狙う
が、一気にメダルを失つたことによる弱体化が見えた

今がチャンスだ。いや!! お前は!! 「

ディケイドRFは金色のカーボンをハーフハーフは装填 それと同じようにディケイドRFとディエンドCF、ディエンドも金色のカーボンをドライバーにセットする

『検索を完了した。このメモリでいくぞニ』

「オッケー」

モーリスの「スリスモー」を「ギルバースト」に譲り、

「カリスマ！マキシマムアーティスト！」

「スキニシングチャージ！」

「せつ！」

オーズSTTBはメタルを再スキャンして強化されたバッタレック
で空に飛び上がる

上・川・路・シ

「口・ケ・ツ・ト・ド・リ・ル リミットブレイク！」

フオーゼRSは左腕のロケットモジュールを一回解除してドリルスイッチをオンにしてモジュールを装備、そしてレバーを入れる

「うわー！」

両腕のロケットモジュールの出力でフォーゼも空に飛び上がっていく

[[ディ・ディ・ディ・ディケイド-]] [[ディ・ディ・ディ・

「ディエンド！」

「エクストリーム！マキシマムドライブ！」

「おりやああああああああ！」

「はつ！」

「『ダブルプリズムエクストリーム！』」

「せいやああああああああ！」

「ライダーダブルロケットドリルキィイイック！」

ディケイドPCFとディケイドLCFの超強化ディメンションキック、ディエンドCFのディメンションバスターとディエンドのディメンションシート、WCJXのダブルプリズムエクストリーム、オーズSTTBのスーパー・タトバキック、そしてフォーゼRSのライダーダブルロケットドリルキックがガラ使徒統合態に次々と炸裂する

『ぐつ…ぐわつ…！ぐわああああああああ！』

A・Tフィールドは三機のエヴァによって中和されており、防御の術のないガラ使徒統合態は完全に爆散した

「コアを潰せ！」

『てやつ！』

そして爆散したメダルの中に使徒のコアを見つけたフォーゼRSは指示を飛ばし、それに答えた初号機がマゴロクソードでコアを一刀両断にした

ガラは器を失い消滅。そして第10使徒サハクイエル、殲滅完了の瞬間だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2504y/>

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー フォーゼ&OOO

2012年1月8日22時49分発行